

自由への飛翔

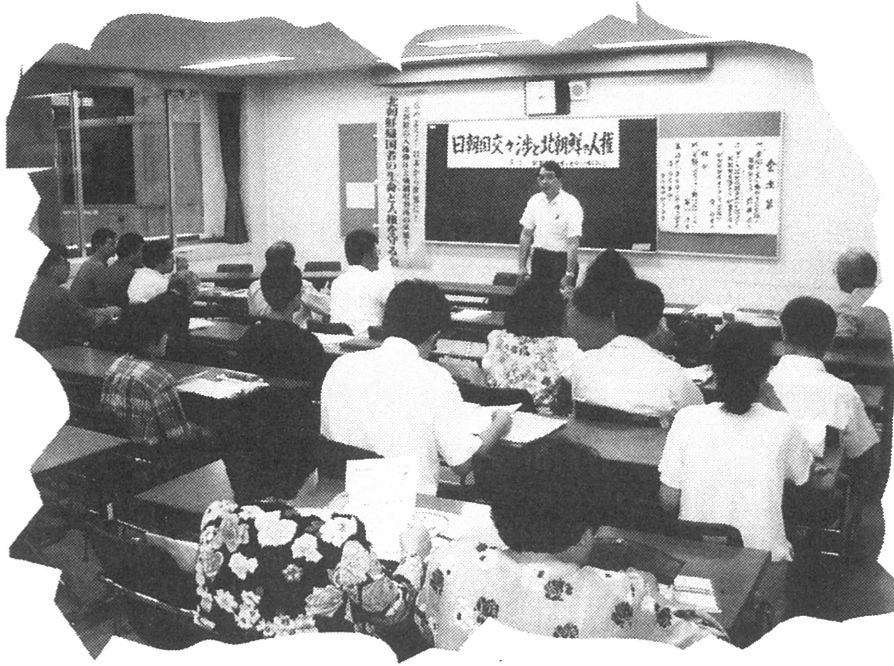
かるめぎ

갈매기
カモメ

No.35
2000.11.1

特別増ページ号

いのち
北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会



『日朝国交交渉と北朝鮮の人権』集会
9月16日 渋谷区勤労福祉会館で

「全帰国者の自由往来を求め
日赤関係者などにアピール」
豪雨の中、守る会会員多数が参
加 9月17日オリンピック記念
青少年総合センター正門前で



CONTENTS

「日本人妻里帰り」アピール行動	1 . 2
9/16集会：講演会	3 ~ 7
支部設立を目指して！	8
第 13 回関西支部講座	9 . 10
ワシントン便り	11 . 12
ソウルからの通信	13 . 14
読者の広場	15
帰国者からの手紙	16

人権年表	17 . 18
「詩二篇」	19
「この人に聞く」	20
支部だより	21 ~ 23
ニュース	24
A A H 報告書 (要旨)	25 ~ 31
小説「ことづけ」	32 ~ 38
編集後記	39

日本人妻16人が、9月12日から18日まで里帰り

守る会は9月12日成田空港で
17日宿舎のオリンピック青少年記念センターで
全帰国者の自由往来を求めるアピールを行った。

3人が成田空港で頑張る

9月12日夕の第三回日本人妻里帰りで

恥ずかしいことに里帰り第3陣が9月12日に来日することを、9月初めマスコミ記者の取材から知った。それほど今回の里帰りについてはマスコミは事前報道をしなかった。これは6月15日、平壤での南北共同声明以来、北朝鮮の人権問題をとりあげない社会やマスコミの風潮の反映だった。守る会は2年前の第2陣のとき初日(空港)と帰国前日(宿舎)の2回、頑張ってアピールした経験があり、今回まわりが低調な中、それすらやらなかったら守る会の存在の意味はなくなると考え、チラシをつくり、横断幕をもって成田に向かった。

第2空港ビルの出迎えロビーに行くとき私服警官が沢山いて、我々の行動を警戒している様子であった。最初にチラシをマスコミ関係者にまくと肝心な意思表示が阻止されると考え、ひたすら日本人妻たちを待った。我々のメンバーが金民柱さんを含め3人であることが決定的に不利であった。いつのまにか我々は私服に取り囲まれていた。会員の一人に私のカバンを持ってもらい、一行が出てきたところで民柱さんと2人で「もっと多く、もっと早く、国籍の区別なく」と書いた横断幕を広げたのであるが、何と警官や私服ではなく、成田空港公団の4~5人の職員に制止されてしまった。オリンピックの選手を迎える時にも制止をするのだろうか。全く政治的な規制である。

里帰りが続く限り我々は成田に行かねばならぬ。今回は空港での守る会のアピールを絶やさなかったところに意味があった。里帰りできない日本人妻たちのためにも皆さん頑張ろうではないか。

(小川晴久 共同代表)

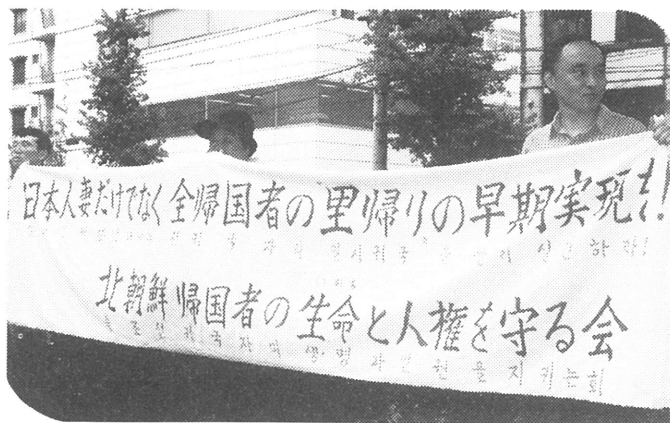
日赤関係者などにアピール

豪雨の中、守る会会員多数が参加

9月17日 オリンピック青少年

記念センター正門前で

日本人妻の離日前日、9月17日午前11時から午後1時まで、「守る会」では宿舎のオリンピック記念青少年センター正門前で、恒例のアピール活動をした。日本人妻たちは、その日故郷訪問から宿舎に帰ることになっていた。あいにく、当日は台風が接近中という悪天候だった。にもかかわらず11時前から集まった会員が、のぼりと横断幕をかかげ、用意したチラシのアピール文を歩行者やセンター利用者に配った。



昼近くなると、雨も激しさを増し、正門前に立ちはだかつて監視していた日赤や警察関係者も心配して傘やタオルを差し入れた。監視する側にも気の毒でもあり、暫時入り口近くの建物の軒下に雨宿りした。やがて雨もあがり、活動を再開。その頃には参加会員も10人近くになった。チラシ配布と「日本人妻と帰国者の自由往来を認めよ」「強制収容所を廃止せよ」「北朝鮮赤十字社よ国際人道法を守れ」「日赤よガンバレ」などのシュプレヒコールを繰り返した。センター利用者もほとんどがチラシを受け取った。

日本人妻の親族関係者らしい和服姿の婦人も、われわれに手で合図して中に入って行った。また月に一度の研修会に参加したという在日韓国朝鮮人グループの一人も良いことをしていると、われわれを励ましてくれた。途中から、ふた手に分かれ、車の出入り口でも横断幕をかかげることにした。その前を



日本人妻が乗っているらしいタクシーが何台か通過した。そのうちの一台に日赤関係者が急いで同乗して別の入り口に向かって走り去る一幕もあった。

また、この日のアピールに参加した朴春仙さんに、かつてシン・ガンスの捜査にかかわったという地元の警察署員が話しかけたりした。くだんの警察署員は「趣旨は分かるがこんなことやってどれだけ効果があるのか」と余計な心配までした。この日はマスコミや日本人妻への直接のアピールはできなかったが、持参したチラシを全て配り、大勢の日赤関係者にアピールできた成果はあった。

(編集部)

旧態依然たる里帰りを批判する

—日本人妻里帰り第三陣を迎える折に—

私たちは今から三十数年前に日本から北朝鮮に「帰国」した九万三千人の人々(うち日本人妻五・六千人・推定)の生命(いのち)と人権を守るために活動している市民団体です。

三年前の第一陣の時も、二年前の第二陣の時も、こんな少人数の間歇(かんげつ)的な里帰りでは十年、二十年かかってしまう、日本人妻や日本の父母達は高齢者になっているから、生きているうちに里帰りさすべきだ。費用がかさむというのであれば船を使ってでも一度に二百人、三百人規模で、高齢者から優先的に里帰りさすべきだと主張しました。

二年前の二月、たった二回計二十八名の里帰りで打ち切れ二年半も中断し米(こめ)支援や日朝交渉再開と共に再開される、しかも規模もやり方も以前と全く同じという現実をみると、日本人妻里帰りが完全に政治の道具と化していることは明白で、私たちの要求が全く無視されていることに強い怒りを覚えずにはいられません。

<三年後の里帰りの約束が全くの反故(ほご)に>

四十年前日本人妻たちは三年後の里帰りの約束を信じ、親の反対を押し切ってでも北朝鮮に渡りました。一九六二年秋、日本人妻たちは署名を集め、里帰りの履行を北朝鮮政府に求めました。その運動の先頭に立った日本人妻たち〔その中にテノール歌手だった永田(ながた)弦次郎(げんじろう)=金永吉(きむよんぎる)の妻 北川民子(きたがわたみこ)さんがいた〕やそれに協力した夫、芝田孝三(しばたこうそう)さんが山送り(収容所送り)されたと伝えられています。里帰りが37年間実現しなかった背景には、このような痛ましい悲劇、誠実で勇気ある多くの日本人妻たちの闘いと収容所送りがあった事実を皆さん忘れないで下さい。日赤はこの悲劇を調査する責任があります。

マスコミの皆さんもこの悲劇を知らないで日本人妻里帰りの報道をし続けるのはジャーナリストの名に恥じます。

<日本人妻たちは三年前の当局の談話に縛られている>

三年前の七月に出された北朝鮮当局(アジア・太平洋平和委員会、委員長:金容淳(キム・ヨンソン)の日本人妻里帰りについての談話ほど恐ろしい談話はありません。日本人妻の現状規定の部分です。彼女たちは「国家と社会のあらゆる物質・文化的恩恵を受けつつ張り合いに満ちた幸福な生活を享受している」と、

一体何人の人がこの規定に該当するのでしょうか。この規定の真赤な偽りを衝きましょう。

<帰国者と在日家族は離散家族化しつつある>

離散家族とはどういう意味でしょうか。お互いの住所はわかっている、自由に会えないと言う意味だけではありません。お互いの住所がわからないというのが本来の意味です。

最近二世の時代になり、お互いの住所がわからなくなっている家族が増えていることを最近知りました。日本人妻も同じです。一体何人の日本人妻が今も健在なのか、北朝鮮政府は明らかにする必要があります。日本政府はいかなる努力をしているのか、強く問いかけます。今回里帰りした十六人の皆さんも来日中にこの点を少しでも語って下さい。

2000年9月16日

北朝鮮帰国者の生命(いのち)と人権を守る会

南北会談、食料支援、戦後補償や難民問題などテーマに 盛況だった「日朝国交交渉と北朝鮮の人権」集会

「日朝国交交渉と北朝鮮の人権」と題する集会が、守る会の主催で9月16日午後、東京都渋谷区の勤労福祉会館で開かれた。日朝国交交渉がこの8月に東京で行われ、9月12日からの日本人妻の来日中という時期に企画された集会でもあり、会員や会員外も含め参加者は会館集会室の定員60名を上回る盛況ぶりだった。



小川晴久共同代表

当日はまず小川晴久共同代表から集会の趣旨説明があり、各講師の講演に入った。

最初に、ちょうど米国から帰国中で守る会共同代表の萩原遼さんが、ワシントン滞在中の生活ぶりを交え、米国から見た南北首脳会談と日朝国交交渉をテーマにユーモアたっぷりに語った。

そして、明治大学講師の川島高峰さんが、フランスの援助団体のアクション・アゲンスト・ハンガーの北朝鮮からの撤退理由を分析し、日本でも関心の高いテーマである食糧支援など人道援助のあり方を追及した。

次に、福岡から上京中の北朝鮮難民の金龍華さんは、支援に対する挨拶で、北朝鮮脱出とその後の経緯を紹介したほか、帰国者と収容所にもふれ聴衆にショックを与えた。さらに、日朝交渉で中心的なテーマになっている北朝鮮への日本の戦後補償のあり方について運営委員の谷川透さんが、これまでの韓国との戦後補償の運動への取り組みをもとに解説をした。

司会陣は佐伯浩明、金国雄、佐倉洋、高柳俊男各委員、さらに通訳では川崎孝雄委員という守る会運営委員の総力をあげたものになった。惜しむらくは参加者と講師との質疑応答の時間が少なく講演内容の掘り下げが十分にできなかったことだろう。

終わりに会員の小野美智子さんが、日本人妻来日に関連して、「旧態依然たる里帰りを批判する」という集会宣言を読みあげた。また、講演会終了後、多くの方たちに懇親会へ参加して頂きました。
(編集部)



萩原遼共同代表



川島高峰さん



川崎運営委員&金龍華さん



谷川透運営委員



佐倉運営委員&金国雄運営委員



佐伯運営委員



小野美智子さん

アメリカの国家戦略と 南北首脳会談及び日朝交渉

萩原 遼 共同代表

昨年10月に、アメリカの元国防長官のウィリアム・ペリー氏が、クリントン大統領の委任を受けてまとめた北朝鮮政策が発表されました。いわゆるペリー報告です。この中でこういうくだりがあります。「米国は北朝鮮を武力で倒すことも考えたがあまりにも犠牲が大きいことがわかったので、それはしないことにした。この政権はまだまだ長続きする。われわれはこの政権と交渉する必要がある」

これを読んだとき私は1990年代の10年間、アメリカと北朝鮮は戦争の瀬戸際までいく対決の時代は終わった。米朝は手打ちをした。これからはアメリカは金正日政権を助ける側に回るだろう—と思ったのです。「ならず者国家」と呼んで武力制裁の対象だった北朝鮮と手をとりあっていくという、まったく新しい段階に入ったのです。

このとき同時に思ったのは、日朝国交の動きと南北朝鮮の関係改善の動きがあるだろうと予測しました。アメリカが動かしている。アメリカの描くデザインに沿って日本と韓国は絵をかいている。彼らの本音をさぐる必要があると思って、5月末にワシントンに数ヶ月の予定で行ったのでした。着いて間もなく南北首脳会談です。

私の予想どおり韓国の一方的な譲歩だけの首脳会談でした。ギブ・アンド・テークが交渉というものです。金大中氏はギブばかり。いま南北の民衆のもっとも切実な願いは1000万人の離散家族の面会です。約束されたのはわずか200人。こんなペースでは全員が面会するのに5万年かかる。これはやらないと同じことです。金大中氏は少なくとも1万人以上の面会を北にのませるべきでした。

一方、北側もこんな当り前のことをなぜ応じないのか。北側がもっとも怖れるのは南の実情が北に伝わることです。ウソ八百で北の人民をだましていたことが白日の下にさらされる。「私はだまされていた」という人民の怒りは爆発する。「北は地上の楽園で、南はこの世の生き地獄」と教えこんできた。実際は韓国の人たちは十分に食べて、北の人たちが一生味わえない豊かな生活をしていることを知ったら、この50年間のがんばりはいったいなんだったのかとなる。なにしろインスタント・ラーメンすら「この世にこんなうまいものがあるのか」とおどろく人々です。それほど人間以下の生活を強いられています。

これを見て下さい。6月14日付の北の「労働新聞」です。金正日が空港に出てきて金大中氏を出迎えている写真です。「大韓民国金大中大統領」と正式名称を党機関紙に記した。これは画期的です。これまでは「憎むべき米帝の傀儡であり、手先である南朝鮮の反動の頭目」とののしってきたのですから。

それはなぜか。北の経済がゆきづまりにゆきづまらなくなって、韓国に助けを求めざるをえなくなったためです。餓死者300万人をだす食糧危機は世界に知られています。それだけでなく、工業の基本である電気がない。工場は動かない。ものが作れない。食糧増産したくても化学肥料も、農薬もつくりえない。鉄道



は日本の植民地時代のものをいまだに使っている。これを全面的に改修したり、単線を複線化するには莫大な金がかかる。

もはやお手あげの状態にいたった結果、これまでの政策を180度変えて、韓国から援助を受け入れることに踏みきったのです。

しかし韓国もいま経済が苦しい。韓国の力だけでは、ゆきづまった北朝鮮を支えることはできない。そこから日本も応分の負担をしてほしいということで、日朝国交正常化が急浮上してきたのです。これもアメリカの政策転換の結果です。

アメリカはかつて93年から94年の北朝鮮の核開発計画にはげしく反応し、武力制裁すらほめかしました。北も強硬な姿勢で「ソウルを火の海にする」と反発し、戦争の瀬戸際までいきました。もし朝鮮で戦争がおきれば、アメリカの兵士が5万人は死ぬだろうという試算が出てアメリカは震えた。ベトナム戦争の頃とはちがって、いまやアメリカの納税者は、「なんのために他国でわが国の青年の血を流さねばならないのか」という考えに変わっています。ここから北朝鮮にたいする宥和政策が生まれて、ペリー報告という形で完結するのです。

日朝国交の必要は私も40年以上主張してきたことで、人後におちません。しかし、こんな重要な問題をアメリカの政策にそって押し付けられることにはがまんならない。いまのマスコミや日本の保守政界では、南北情勢が急進展しているから日本もバスに乗りおくれるなど、はやしたてています。日本人の拉致問題や、北のミサイル発射問題などをとり下げて、とにかく国交を結ぶことだという主張が手をふっている。アメリカのお墨付きがあると、急に元気になるのが日本のマスコミや自民党、外務省の悪いくせです。

かつて1990年9月に自民党の金丸信氏らが金日成と国交回復を約束したときは、アメリカは激怒して、「出すぎたまねをするな」と金丸氏を別件で失脚においこんだのはまだ記憶に新しいところです。あのときは核疑惑の北朝鮮と国交などとてもないと反対したアメリカが、こんどは早くやれとせかせている。こんな勝手なふるまいがどこにあるのか。朝鮮と二千年の交流の歴史をもつ日本は、日本の立場に立ってじっくりと懸案を解決しながら納得のいく国交を開くべきです。懸案とは被拉致者の問題、植民地支配の謝罪と清算などのほかに私たちの会が発足以来かかっていた日本人妻全員の里帰り、在日朝鮮人帰国者の往來の自由を北当局に約束させることが含まれます。

懸案をひとつひとつ詰めていくといつまでたっても前へ進まないから、とにかく国交だ、懸案はそれからでいい、という意見があるが、とてもないことです。懸案が解決されてこそ国交となるのである。50年以上にわたって日朝国交を妨害してきたのはアメリカであり、それに無条件に追随してきた日本の歴代内閣です。アメリカの政策が変わったら手のひらを返したように騒ぐ。急ぐ必要などどこにもない。

人道援助のあり方について

川島 高峰 明治大学政治学講師

フランスに拠点を置く世界的な人道活動団体、アクション・アゲンスト・ハンガー（反飢餓行動、以下AAHと略称）は、この3月北朝鮮の活動から撤退する声明を発表した。同声明からは人道活動を通じて知見した北朝鮮の社会の実情を知ることができ、極めて貴重な報告と言える。詳しくは同声明の全訳（25～31ページ）にゆずるが、今回の撤退声明から少なくとも人道援助と民主化支援について次のことが言えると思う。

第1に、民主化の支援こそ人道援助の枢要である。政治体制の如何を問わず生命の危機に瀕した人々に手を差し伸べることが人道支援であることを否定するものではないが、そもそも批判者や既存の社会に変化をもたらしかねないような支援は受けないといって何かと拒絶するのは北朝鮮の方である。そのことは今回のAAHの撤退声明からも明白である。

「飢えた子供は政治のことなど知らない」（レーガン大統領）とは人道援助に政治批判を持ち込むべきではないとする人々がよく引き合いに出す言葉であるが、北朝鮮で飢餓に苦しむのは子供だけではない。このような言葉で政治批判抜きの人道援助を正当化するのは「北朝鮮の全ての飢餓民衆は政治的に子供である」と言うに等しい。人道に名を借り飢えた子供を政治利用することには同意しかねる。

第2に、北朝鮮の飢餓とは金正日体制への忠誠の残虐な濾過装置なのである。出身成分のヨリ「良い」ものがヨリ多く配給にあずかるシステムが存続する限り飢餓はなくなる。援助は特定の階層を飢餓から救う事はあっても決して完全統制区（強制収容所）に届くことはなく、その特定階層への援助すら受益者との接触を当局は厳しく制限している。批判を伴わない食糧援助は単に出身成分の高低格差を絶望的に拡大させ、忠誠の残虐な濾過装置を強化するだけである。AAHの当局への提案はこの明らかに存在する援助から排除された人々へ接触を試みようとするものであった。しかし、当局はこれを拒絶し、そのような人々の存在すら否定したのである。このことは北朝鮮において飢餓は統治政策の一環であることを示し、この枠を越える援助を決して当局は認めないのである。

第3に、それにもかかわらず、なおかつ、食糧援助に意義を見出すとすれば、それは食糧そのものが情報の媒体となり得るという点につきる。おおよそ国境を往来するものは人、金、物、情報の四つであり、北朝鮮は金と物だけの往来を求めている。しかし、情報の流入を伴うことなく物を往来させることは困難である。このような情報を含め極端に物事が窮乏化した社会ではささいなことが大きな情報源となる。実は似たような状況を日本人も半世紀以上前に体験した。例えば、米軍は大量の宣伝ビラを撒いたが、戦後、その効果を調べたアメリカ戦略爆撃調査団の報告書には印象深い一節がある。



「私がビラを母に見せたところ、母はアメリカが世界中の原料をすべてもっているにちがいないと申しました。『見てごらん！ ビラをまくのにこんな立派な紙を使ってるなんて！』と申しました」

ビラそれ自体が情報の媒体となったのである。このビラがもし食糧だったらどうであったらうか。北朝鮮に空爆を、などと勇ましいことを言う向きもあるが、爆弾の代わりに米俵を雨あられと降らせた方があらゆる意味で遥かに大きな効果があるだろう。

また、日本では空襲に伴う大量の罹災難民が地方へ移動したが、この被災者は体制にとって好ましかからざる情報（米軍の空爆に日本が無力であること等）を全国へ波及させる媒体となった。ひるがえって、今日、北朝鮮では食糧を求め多くの人々が国内を移動していると聞く。このような人の移動は同時に情報の移動を意味し、移動の自由が厳しく制限されている体制であることを考えると、国内の情報統制は極めて脆弱であると言える。

第4として、北朝鮮当局にとって海外からの援助とはそれ自体が脅威であり、体制に好ましかからざる情報を流布させる危険な「病原菌」なのである。実際、彼らは外国の援助スタッフが民衆と接触することを最も恐れている。そして、北朝鮮の民衆が完全に精神統制された人々と理解することは大きな誤まりである。大量の越境難民は徹底的な民衆教化をしてもなお総書記の「銃爆弾」とならない人々がいることを示しているからである。かつて日本人は敗戦を前後に大きな意識の変化を示した。それは言論・思想の極端な抑圧と鎖国の体制が外部からの刺激をかえって新鮮なものとしたからである。抑圧と鎖国は長期化すればするほど異文化が民衆に与える衝撃力は大きくなる。

以上のことから、体制に好ましかからざる情報が国外から流入した時、その流布を抑止する機能は極めて低く、民衆の異常にまで高い忠誠心は、むしろ劇的転向の可能性と常に背中合わせにあると理解すべきである。食糧投下による「強制」援助はこの体制のジレンマを撃ち抜く最後の切札となるだろう。このような「作戦」を非現実的と一笑に付す者は、一笑に付す限り北の体制は安泰であるが、逆に一度、その検討に着手すればそれだけで彼らは重大な危機に直面するであろうことを想起して頂きたい。

民衆の飢餓をも政治利用し援助外交を展開する北の為政者は真の愛国者の言葉に耳を傾けるべきである。

貧しくして諂うことなく、富して驕ることなし
(安重根)

「北朝鮮難民 金龍華 (キム・ヨンファ) 氏のあいさつ」

氏は多くの支持者の支援をうけ、大村入国管理センターから仮放免されたことに感謝の言葉を述べた後、時間の関係から、事前に氏が用意してきた挨拶原稿を主催者側が翻訳朗読し、その後残された時間内で帰国者に関する話を語ってくれた。以下はその概略である。なお氏が提訴した難民不認定処分取消請求事件・退去強制令書発布処分取消請求事件の最終弁論・結審は10月30日福岡地裁301号法廷で行われる。勝訴して日本に定住できることを願ってやまない。

(川崎孝雄運営委員)



識は一層強くなりました。

私は1953年、現在の地名では平壤市兄弟山区域で生まれ、北朝鮮で高等中学校を卒業し、1970年朝鮮人民軍に入隊し、1974年に朝鮮労働党に入党。人民軍に12年間服役しましたが、資本主義社会特にアメリカ、日本、韓国に対しては徹底した仇敵だという認識しか持てませんでした。1976年8月18日、板門店ポプラ伐採事件当時の”韓半島の平和は戦争を通じてのみ達成される”という教育によって、その認

日本人妻への迫害はなはだしい

人民軍将校として除隊後、社会安全部教化局(刑務所)指導員として4年間勤務した過程で人間弾圧の野蠻性が北朝鮮社会にいかに無慈悲に具現されているか、実体験を通じて切実に感じました。朝鮮戦争越南者家族、北送在日僑胞、そして日本人北朝鮮生活者に対する政府の監視と迫害がいかに深刻であるか知ようになりました。北朝鮮社会自体が独裁になっており、独裁者父子(金日成・金正日)に対する偶像化しか許容しない社会であり、一言の言葉と行動が死の道に結び付く社会が北朝鮮社会であります。

列車事故で家族全員が収容所送りの危険に

1988年7月、咸興鉄道局端川機関車隊乗務員指導員在職中の2号列車事故で政治犯の処罰を受けそうになりました。私は社会安全部所属教導官として勤務した当時、21号管理所をはじめ耀徳管理所についても知っていました。人間が獣にも劣る存在として扱われる政治犯管理所。妻と3人の息子を残し、北朝鮮脱出を決めました。この状況は北朝鮮に住んだことのない人には想像もできないでしょう。私が黙って脱出しなかったなら、家族全員が政治犯管理所に収容されます。行方不明なら家族に及ぶ影響はある程度差があります。妻が知って、私を即座に申告すれば、妻は党に忠実な人となり、私は大反逆者になります。申告しなければ妻は同罪です。

命がけの中国亡命もまた死の危険

私は鴨緑江を渡り中国に入り、やっと北朝鮮社会が人々を騙し欺いているか知ようになりました。私は韓国行きを決心しました。北朝鮮の実情を知らせ、我国統一のため

一生懸命生き、統一された日には北朝鮮に置いて来た息子たちに、この父が歩んで来た道が恥ずかしくない道であったことを見せてやりたい一心でした。しかし中国での脱北生活は容易でありませんでした。乞食生活、下働き生活の中でも身の危機を感じて偽造した住民登録証、それが私の運命を試練に駆り立てるとは、当時想像もできませんでした。中国では警察に賄賂をやればどんな事でもできるというのは、すでに知られた事実です。

韓国に密航、逮捕・拷問

在中韓大使館に助けを拒まれ、1995年北朝鮮社会安全部と中国公安部の合同捜査にかかり、ベトナムに密入国し韓国大使館の助けを受けようとしたが、外交的摩擦という理由で拒まれました。ベトナムで逮捕され、北朝鮮に送還されそうになりましたが、ベトナムから北朝鮮行きの飛行機は一月に1回程度なので、脱出の機会を得る事ができました。監獄を脱出し、再び中国に渡り、1995年6月0.5トンの小船で韓国に一次密航をしましたが失敗し、二次密航の末韓国に到着しました。夢に見ていた故国に来たと言う安堵感はずの束の間でした。安企部に移送され、北朝鮮からどんな任務を帯びて来たのかと過酷な拷問を受け、中国住民証確認という理由で出入国管理事務所に移され、結局中国への追放が決定されました。

中国への追放は即北朝鮮への追放なので、死ぬと言うも同然です。北朝鮮からの亡命者たちは、私が北朝鮮に送還されれば自分たちの父母兄弟親戚たちが北朝鮮で苦痛を被る事を考えて、私の問題のために非常に努力してくれました。韓国で保釈されたとき、ソウル高等法院に強制退去命令無効訴訟を起こしました。韓国から中国政府へ35回以上確認を求めましたが公式確認はまったくなされませんでした。そんな中、北朝鮮にいたときから知っていた人、特に人民軍時代にある部隊にいた人の息子が韓国に亡命したときは、彼らの証言で裁判も行われるだろうと考えましたが、安企部が亡命者たちに証言できないように圧力をかけていた事を知ったときには絶望しました。

日本に脱出

そんな中、1997年大統領選挙当時、国民会議金大中総裁と越北国民会議天道教教領オ・イクジェとの手紙事件が起こり、その手紙の真偽を確認する要請を国民会議国会議員たちから受けました。彼らは、真偽確認の席上「私の問題は政治的に解決しなければならない問題だから、裁判を取下げても心配する事は無い。」と言い、それを信じて私は訴えを取下げました。私の運命はまた変わりました。再び収監・追放命令を受け、1998年4月韓国から日本へ脱出しました。(金龍華)

以上が挨拶の概要ですが、帰国者に関連して次のような事も語ってくれました。

※北朝鮮政治犯管理所には約20万名が収容され、その75%は帰国者と越北者である。
※端川海辺で、海に向かい拍手をしている女性を見て、当時は狂った女性だと思っていたが、日本に来て祈る姿を知り、あれは日本に向かって何か祈っていた帰国者だと思う。

「日朝交渉と過去の清算」

谷川 透 戦後補償問題専門家：守る会運営委員

日朝交渉での双方の主張

第九回日朝国交正常化交渉で、日本は「侵略と植民地支配でのお詫びを表明した 1995 年の村山富市首相談話と同じ認識。互に残してきた財産などの返還を求める請求権で処理すべきだ」と言っています。北朝鮮はどう言っているかという、過去の清算については、「政府の最高責任者が謝罪を表明し、公的拘束力のある公式文書に明記を」「過去の人的・物的損失に対し十分な補償をして解決すべきだ」と言っています。

過去の清算については、日朝外相会談で日本が「取り組む」という姿勢を示しています。どういう形で取り組むかという、「経済協力で清算する」（8月29日付け「朝日新聞」記事）と言っています。要するに、日韓方式でいきたいということです。日本は「対立がある中で合意に達した例として、経済協力で決着した日韓方式について適宜研究し、今後双方の接点をさぐる作業を進めたい」と提案しています。朝鮮総連の戦後補償問題をやっている人が、お互いの間で落としどころは決まっているんだということを言っていました、最終的に日韓方式でいくのではないか、という気がします。

8月27日付けの朝日の記事で対外文化連絡協会の鄭崙会（ジョン・ユンヘ）日本局長という人が、日本の市民訪朝団に対して「慰安婦問題は国家間補償を、と述べた、とあります。さらにその後で、「一部の国には個人補償を求めている人もいるが、わが国にはいない」と述べたということが書かれています。こういう姿勢は非常に残念です。

日韓方式とは

日本政府は日韓方式でいきたいと言っていますが、日韓請求権協定とはどんなものだったのか、見ておきたいと思います。これについては延々と長い交渉が行われました。韓国側は未払賃金など8項目を持ち出してきたわけですが、日本側は、未払賃金って言うなら金額を言ってみろって言うわけです。そんなもの言えるわけじゃないですね。日本の方に資料は全部あるわけですから。で、ほら、言えないだろう。そういうものは主張するのはやめて、経済協力でいこうということで、無償3億ドル、有償2億ドルの経済協力を決めたわけです。現金では渡さず、生産物と役務の供与という形でやって、日本の経済発展に役立ったわけです。



アジア諸国が日本によって一方的に侵略されたり植民地にされたりして蒙った損害というのは、普通の戦争と考えることは出来ない。国家間賠償では済まないものがあるわけです。それは軍人・軍属として引っ張られた人であるとか、強制労働者であるとか、慰安婦であるわけですが、こういった人たちは国家が賠償を受けたから、ハイ決着がつかましたというふうにはいかない性格が非常に強いわけです。

こういうものについては近年、個人補償というものが大きく取り上げられるようになってきているわけです。

朝鮮半島の被害者の大略

韓国と北朝鮮を合わせて36万5,263人という人が日本軍の軍人・軍属として動員された。うち戦死をした人は2万1,919人で、この人たちは靖国神社に本人の信仰の確認や遺家族の許しも得ないで、勝手に合祀されたことになっています。また軍人・軍属には障害を負った人がいて、彼らは何の補償も受けていない。また軍人・軍属の俸給の大部分は戦後1950年に東京法務局に秘密裏に供託されて、今では受け取る権利がないものとされてしまっています。同じことは70万人の人が朝鮮半島から日本内地に連行されてきて、うち2万人程度の人が死んだと言われる強制労働・徴用の場合も言えます。彼らも未払賃金の問題を抱えています。

あと慰安婦の問題があります。1937年に南京事件が起き、日本軍があまりにもレイプをして世界中に報道されてしまい、日本軍の汚券にかかわるというので慰安所がつけられました。朝鮮半島から8万人が慰安婦として引っ張られたと定かっています。これは関東軍特別大演習というのがあって、このときこれぐらいの将兵の数には、これぐらいの慰安婦をということで準備をしたという資料があって、外地に行った350万人の兵隊に10万人の慰安婦がいたと推定し、約8割が朝鮮半島出身者だったことから割り出した数字です。

(谷川氏の講演内容を編集部で要約)

中四国支部 設立を目指して!!



<広島港フェリー乗り場にて>

中国・四国地方における支部設立に向け10月14日～16日の日程で萩原遼共同代表と金国雄運営委員の二人は広島、松山へ赴き当地の中心的な会員及び関係者の皆さんとお会いし、設立準備に向け懇談会を持ちました。そして来年3月頃をめどに支部結成が申し合わされた。(編集部)



<内子町での講演と懇談会>

<支部設立を目指して!>

福本正樹(愛媛県)

10月15日、愛媛県に萩原遼さんと金国雄さんが来られ、中四国支部設立準備会議が行われました。最初は、松山市でという依頼でしたが、会議・懇親会・宿泊を兼ねた場所が見つからなかったため、私の地元の内子町に来てもらいました。内子は、松山より車で20分ほどの位置にあります。

会議は、全体で12名の参加があり最初に、萩原さんの講演が行われました。その後、内子町の見学を行ってもらい、四国で二つしかない芝居小屋の一つ「内子座」、明治に木蠟(もくろう)で栄えた「芳賀邸」、映画撮影も多い。その周辺の町並みを駆け足の見学でしたが、何か感じてもらえるところがあれば幸いです。

その後、「守る会」の中四国支部の可能性を検討し、来年の春までにめどをつけようということになりました。

私の感想として、短い時間でしたが大変有意義な話し合いであったと思います。話し合いの内容を実行に移すべく検討を進めねばと思います。

数日後、この話し合いで知り合った朴玉枝さんより、歌集「身世打鈴」をいただきました。一首を紹介すると、「強制連行の労働に果てし同胞は碑もなく埋もる別子銅山に」大変立派な歌集で驚きました。



<福本さん&萩原さん&松浦さん>

<懇談会に参加して>

松浦照雄(愛媛県)

最近「カルメギ」がこない。会費切れで郵送停止にでもなったか? 問い合わせでもしてみようか? と思っていた矢先に封書がきた。

封筒は「守る会」専用のもの、差出人の名は「萩原遼」。「…別紙のように10月15日PM2時に松山駅にご集合下さると…」、あの萩原遼先生から? これは本物かいな? と、いぶかりながらも、どうも本物らしいという結論に達した。

萩原さんは広島講演後、四国に渡り、数名の会員と懇談されたいとのことであった。萩原さんからの自筆の手紙に感激であった。

萩原さんは四国に連絡先があるらしい。そこは会員の方のご自宅らしいが、それにしても私の電話番号と酷似している。市外局番からの10桁のうち6桁まで同じ。後方の4桁が違うのみ。こんな近いところに「守る会」の会員がいるのか? 思わず電話した。確かに私の近所に会員がいた。驚きだった。私のところから、彼のところまで車で10分もかからないだろう。懇談会には出席の旨を伝えた。

懇談会では、萩原さんの「1999年のペリー報告」を根拠とした今後の朝鮮半島情勢の展望は大いに参考になった。また、「守る会」の人権運動を推進する中国・四国の拠点を松山につくろうという話にもなり、私も微力ながらその拠点作りに参加することになった。若輩故、充分なことは何も出来ないかも知れませんが、皆様のご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

さて、萩原さんの印象は才能豊かで、思いやりがあり、気配りのできる素晴らしい方です。また、名古屋から同行したという金国雄東海支部事務局局長はたいへん友好的な方で、話しやすい好男児です。今後とも宜しく!!

懇談会は日曜日の夜であったので、土曜日の夜などの休暇前の気楽さのようにはいかないところもあって、少々話したりない感はありましたが、有意義な懇談会であったことに感謝しています。ご参加された皆様に感謝の意を表します。ありがとうございました。(合掌)

第13回 関西支部講座

米国取材中間報告 萩原 遼

「アメリカの北朝鮮政策と南北首脳会談」

アメリカ政府の朝鮮政策等の研究と取材のため訪米、このほど一時帰国した萩原遼共同代表。萩原遼さんは「南北の統一と日朝国交を期待し支持しながらも、それがすんなりいかない現状」を分析、報告した。
(講演要旨)

南北統一は出来るのでしょうか

私がアメリカに行って間もなく、南北の首脳会談が開かれました。日本の新聞の南北会談の大騒ぎぶりをワシントンの日本のある新聞の特派員は「新聞社というものは、阿波踊りを踊っているようなもので、踊りを踊っている時は、一緒に踊っていないとお前のニュース感覚はおかしいのどちゃうかといわれる。だから踊っている振りをする」という冷めた見方をしている。

私は南北の統一を望んでおり、断固としてこれを支持しています。私が日朝協会に入ったのが、45年前です。高校の同級生の尹元一（私の著書『北朝鮮に消えた友と私の物語』をご参照下さい）に教えてもらった。日朝協会は南北朝鮮の統一と日朝の国交回復をめざし、活動していた。

私は一日も早い南北の統一と日朝の国交回復を望んでいます。

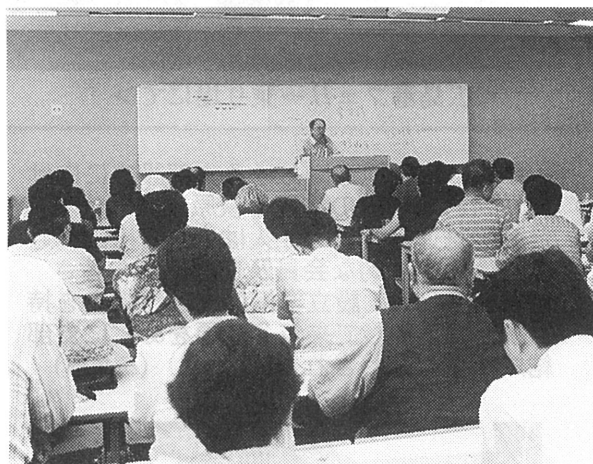
周辺の四国と北朝鮮は統一を望んでいない

ケチをつけるわけではないが、南北首脳の会談で統一が出来るのでしょうか？ 事実は事実として見ましょう。まず南北の統一は当事者どうしてやろうと思えば出来ますが、周囲に大国が四つあります。ロシア・中国・日本・アメリカの意向がきわめて重要だというのはいうまでもありません。この四国、どの国も南北の統一を望んでいません。一番望んでいないのはアメリカ。アメリカは北を消滅させなければアメリカ流の統一は出来ない。

その次ぎは中国が望んでいません。北のいう統一というのは、北によるドンパチをやる統一ではない。今は南進してはいけないというのが中国の態度、かりに南が吸収統一すると、中国は国境に新たに七個師団を配置しなければならない。

中国はいま軍隊を減らしたい。そして経済建設に向きたい。新たに七個師団を増設するのは経済的に大変です。

ロシアは旧ソ連時代に朝鮮が日本の植民地であった時に日本は「おれたちの脇腹に突き付けられた短刀だ」といっていた。それと同じ事になるからロシアも望まない。



日本はどうでしょうか。朝鮮が統一するとドイツに次ぐ七千万人の世界で十番目の大国になる。そんな大国を日本の支配層は望まない。

そして肝心要の北朝鮮が望まない。統一はおろか、交流も望んでいない。手紙のやりとりや、電話がかけられますか。日本から電話をかける可能性はあるが、韓国の人が、北にかけられない。国家保安法に違反する。まず電話回線がない、電話ひとつかけられない、手紙のやりとりが出来ない、まして行くことが出来ない。離散家族の再会問題は、一千万人が離散家族で南北に別れて苦しんでいる。それが今回、わずか百人。それも面会場でしか出来ない。一番離散家族が望んでいるのは、離散家族の家で面会をすること。そこへ行けば、どんな生活をしているのかが分かる。これは絶対許さない。許せば平壤の党の幹部でもポラロイドカメラを知らなかったというのですから、人民をウソ八百でだましてきたことがばれる。「南の人民はもっと苦しんでいるから、三度の飯も二度にし、二度のご飯も一度にして南の同胞を救うために、祖国の統一をめざし頑張ろう」そういうウソ八百をこの五〇年ついて来た。とんでもないウソであった事が北の人民にばれる。

七〇年代の北朝鮮の生活

私は平壤に行って初めて分かった。極たんな貧しさです。まず水道がない。共同の水道はあるが、それをバケツで三階・五階・七階のアパートの部屋に子供たちも動員して、水おけにためる。それが平壤の生活です。私の所は外国人アパートであったかでしたが、けれど一歩外に出ると零下十度くらい。でも手を真っ赤にして外で洗濯している平壤の市民を見かけました。そのころの北の経済は自信に満ちていた時代です。

家で米を切らして、管理人のお婆さんの家にもらいに行ったことがあった。もらった米は何と、古米で砕けてなかには石が交じっている米でした。選り分けるに苦勞した。これでも良い方だったのです。粟やひえなどの交ざったものを市民は食べていたのです。商店に自転車を展示している、売ってくれという売らない。見せるだけです。

この時、これでは南北の統一などとてもないと思った。統一はおろか韓国と交流もやれないことを痛感した。真実の情報が入ってくるのが怖いのです。あれから三〇年近くたちましたが、北の状況は同じで、変わっていない。むしろ悪化している。

帰国した親友、尹元一に会えると思ひ消息を聞くと妨害される。自分で探しはじめるとスパイ扱いされる。私は仕事上で、韓国の新聞が必要だから労働党の幹部に頼んだら、いやとはいわない。「考えましょう」という。考えてくれましたかという「考え中」と、いう。つまり駄目だということです。きょうここに出席のKさん、彼は数年前観光で平壤に行き酒に酔い平壤のホテルで韓国のCD(カセット)を近くにいる者に聞かせたものだから、「ちょっとこい」とつれていかれ、パスポートを取り上げられた。こんな状況もある。

結局一年で私は彼らによって追放となりました。その原因はこの国を作りあげているウソ八百の体質を知ったためです。それを私に暴露されないために、そして北の人民に南の真実を知らせないための措置であったといえます。

四ヶ国が統一を望んでいない。それに北朝鮮が望んでいない、統一はおろか交流も望んでいない。金大中韓国大統領だけが望んでいる。この人の願望だけが韓国の新聞を支配している。

ワシントンの取材から

金友錫という人がおられます。韓国統一省の次官をしていた方で、今ワシントンの戦略研究所の客員研究員です。彼にワシントンでお会いしたので聞いたのです。「何で日本の新聞があんなにはしゃぐのか」と聞くと「それは日本の新聞は全部韓国の新聞を見て書いているからですよ」という。韓国がはしゃぐと日本がはしゃぐという事です。

金友錫さんは「韓国の大新聞は全部赤字ですよ。だから政府が銀行に融資をストップさせると倒産する新聞社もでる。だから倒産ないように政府の顔色を見ている。みんな一緒の記事になるのはあたりまえ、唯一黒字の朝鮮日報だけは独自の

反政府の記事も掲げる」といわれる。そういう事で韓国の新聞は政府が、そしてかつてのKCIA(現国家情報院)が仕切っている。それを日本の新聞が見て書くものだから、一緒になるのはあたりまえというわけです。「もっと日本の記者は勉強して見識のある記事を書いて欲しい」といわれる金友錫さんの意見に私も全く同意見です。大阪シナリオ学校の校長、杉山平一先生(詩人)の詩を紹介します。

「信号」

いつの時代でも信号が変わるとどつと
人や車が動きだす。あれは恐ろしいものだ

日本のマスコミが一色に染められ、朝鮮半島に近く統一がくるなどという幻想をふりまかないこと、恐ろしいことが起こらないことを望みたいものです。

南北会談のお膳立てはアメリカ

南北会談のお膳立てはアメリカであると思う。具体的な根拠は、九三~九四年の北朝鮮の核疑惑に対して、戦争の寸前までいった。そのあおりで金丸訪朝団にストップを掛けたのもアメリカ。

昨年10月に発表されたアメリカの北朝鮮政策であるペリー報告によると「金正日政権を武力で倒すことをしない。…この政府と交渉せざるを得ない」とあります。北と戦争をすれば、アメリカは五万人の死者が出ると予測している。韓国は百万人単位の死者が出る。カーター前大統領が金日成と会談、合意できる方向になった。三万七千人の駐韓米軍を北は人質にとったようなもの。もちろんペリー報告の背景にはアメリカ国民の平和への世論がある。アメリカ政府が戦争は出来ないと認識したことが、南北会談につながった。アメリカの都合による南北会談です。一方、北朝鮮は欲しい物はもらう。鉄道、電気などが欲しい。もらうものをもらえばまた閉ざしてしまうでしょう。

南北会談と日朝国交回復がセットで進んでいる。インフラなどの支援の資金は日本からということでしょう。アメリカの指揮棒による日朝国交回復など不愉快きわまる。

金正日がかぎを握っている

南北が自主的な統一に向かうかぎは金正日握っている。百人の交流でなく一千万人の離散家族の交流を。十六人の日本人妻の訪問でなく、全ての日本人妻の訪問を。全ての北朝鮮帰国者の自由な往来。もし金正日がかぎを握るなら画期的といえる。統一へと発展するでしょう。しかし金正日はそのとき民衆に八つ裂きにされるかもしれない。彼が一身を投げうって人民のために"時代"を切り開くならば、別の評価となるでしょう。

(文責：八木隆)



8月末に一時帰国しました。末息子が急に結婚することになったから帰ってきてくれないかという兄夫婦のたのみ。あわせて亡父の33回忌と亡母の17回忌の法要もしたい、からと。8月末の日本の猛暑にはほとんど閉口しました。部屋の中で34度。ワシントンならクーラーなしで室温28度ぐらい。朝晩は20~22度。肌寒いぐらいで、快適にすごしただけにまいりました。

日本に戻ってもうひとつまいったことは、朝鮮半島が統一に向けて大きく動きだしているという見方があふれていたことです。新聞やテレビのために多くの人がそういう風潮に流されていることを強く感じました。

ある本の宣伝文にも枕ことばのように記されているし、友人からきいた話ですが、小学校の朝礼で校長先生が「朝鮮半島も統一は近い、とても素晴らしいことです」とのべたというのです。

たまたま朝日新聞の東京本社がシリーズ「識者に聞く」との企画で私にもインタビューにきたので3時間応じました。朝日新聞は私をこれまで一貫して無視してきたので、どういう風の吹きまわしでしょうか。しかし、この部分は絶対に削られると思うので、『カルメギ』読者の方にお伝えしたいと思います。

(朝日) 朝鮮の南北首脳会談や日朝交渉の報道に厳しい批判をお持ちとか……。

(萩原) 南北首脳会談や共同宣言をすぐに「統一」に結びつけ、「雪解け」とか言って持ち上げているが、それは金大中大統領の願望にすぎない。朝日新聞などは現実を直視せずに、権力者の願望をそのまま先走って報道している。本質は何も変わって

ないのに無責任だ。南北も動き出したから、次は日朝だとか、国民は浮き足立っている。人心を惑わしてはいけない

(朝日) 多くの在日韓国・朝鮮人も、そして韓国の新聞も両首脳合意を歓迎、評価している。統一は民族の悲願であり、過去の植民地支配を考へても、分断に責任の一端がある日本人々が合意を前向きにとらえるのは当然ではないか。

(萩原) そういう論調のために浮かれた一部の在日がいこを叩いてお祭り騒ぎをしているのを見ると、ほんとうに気の毒だ。南北にとっては統一問題は軍事問題そのものであり、38度線を挟んで対峙する百万規模の兵力を少なくとも十万ずつでも減らすとか引き離す合意や、軍事基地の相互査察の実現でもない限り、評価できない。

(朝日) 物事には段階がある。戦争の危険が回避されたのは画期的なことだ。南北国防相も初めて会談した。

(萩原) 国防相同士の会談は京義線の再開のための地雷原の取り除きの交渉など極めて限定的なもの。韓国はもっとつこんだものにしたいが、北朝鮮の体質がそれを許さない。戦争の危機が去ったなんてとんでもない。いま戦争ができない状況であることは事実だ。それは米国も認め、認めたから昨年10月のペリー報告が出た。米国は新たな朝鮮での戦争で数万の遺体袋を用意しなければならないとの想定に震えたし、北も核攻撃を覚悟しなければならず、互いに震えた結果だ。米国はとりあえず戦争がないことを前提に、北朝鮮の体制を長続きさせることを約束した。そんな『国体護持』の宣言がペリー報告だ。

(朝日) 少なくともまず平和共存していこう、ということではないか。それは統一への一歩だ。この時期に2人の南北首脳が会ったことの意味は大きい。

(萩原) 私は逆に統一は遠のいたと考えている。北朝鮮にとって統一とは赤化武力統一か南による吸収しかない。どちらも今はできない。なぜ、金正日総書記は出てきたのか。食糧不足については米国を中心にある程度の国際的支援体制もできたが、電力や鉄道や水道などのインフラが壊滅状態で工業を中心に経済が破たんしている。だから金総書記が表に出てこざるをえなかった。韓国の技術や物資が欲しい。日本からはカネがもらえる。取るものだけとつたら、また門戸を閉ざす。体制もそのまま温存されるわけだ。つまり分断の固定化だ。

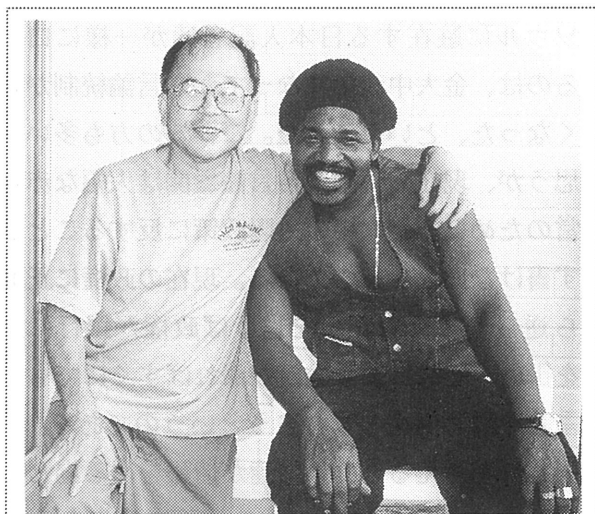
こういう風潮をみると、日本はこわい、一丸となつてあらぬ方向に走り出す、という気があらためてしました。大阪の詩人で杉山平一さんという80歳台の方がおられます。

「信号」という詩があります。

いつの時代でも信号が変わると
どっと人や車が動きたす
あれは恐ろしいものだ

アメリカが北朝鮮政策を大きく変えたのが昨年10月の「ペリー報告」です。金正日体制を倒さない、この政権と交渉せざるをえない、というのがその中心です。倒さない以上支えるということです。南北首脳会談も日朝国交交渉もこのアメリカの政策に沿ったものだという私の仮説を説得力をもって論証するしか、いまの風潮をまきかえすことはできない。しかし、言うは易く、実際はたいへん困難なことだと、ワシントンに来てあらためて思いました。金もコネもない個人が、たどたどしい英語の力で、どうやって厚い壁をこじあけられるのだろうか。

おまけに、去年からずっとかかわってきたある北朝鮮関連の翻訳のナマ原稿が7月にどかっと出版社からワシントンに送られてきました。当初の予定では、ことしの1月に原稿をもらって4月には翻訳を終える段どりでした。しかしうまくいかないのがこの世の常。苦しい両股裂き。4時間ぐらゐの睡眠で毎日机にへばりついている私の姿をみた隣の部屋に住むルームメイトの黒人のオティスが「もっとリラックスせよ」と私を外にひっぱりだしてくれました。



遠さんとオティスさん

「サカモト(私の本名)は、 いつ見てもライティング (書いている)、ライティング」

こんなことではだめだ、もっと「ブロード・アクナリジ」をもてというのです。「幅広い認識」とでも訳すのでしょうか。彼の車に乗せられて、黒人とヒスパニック（メキシコなどの中南米の人）しかいない地域の酒の量販店でビールを買いこみ、玉つきのできるバーで一杯。生まれてはじめてオティスから玉つきのルールを教えられました。オティスは42歳。リベリアから10年前に来た男で、仕事は看板屋。

また別の週末、彼の友人の黒人の家で開かれたパーティーに連れてってくれました。5、6人の黒人。部屋の調度品もすべてアフリカのもの。ジャーナリストや大学の教授も、労働者もその家の主人の小さな女の子たちもいました。音楽が流れている。コーラスの部分でみんなが唱和するのです。

「So many people, So many people died」

ナイジェリアの女性歌手ソニー・オクスンの「第3世界」という歌です。曲もいいが歌詞がいい。長い歌詞のごく一部はこんな調子です。

思いおこせ、第1次大戦で何がおきたか
思いおこせ、第2次大戦で何がおきたか
思いおこせ、コンゴの流血の戦争で何がおきたか

そのあとにコーラスで「たくさんの、たくさんの人が死んだ」と。そしてナイジェリアの内戦で、ベトナムの爆撃で、ソエトの虐殺で・・・と、つきからつきへとつづきます。私が日本人であり、北朝鮮問題の専門家だと紹介されたために、みんなが即興で歌うのです。

思いおこせ、ヒロシマで何がおきたか
たくさんの、たくさんの人が死んだ
思いおこせ、北朝鮮で何がおきたか
たくさんの、たくさんの人が死んだ

みんなの唱和の中で、世界はひとつだということであらためて感じさせてくれました。

この夜のことを多分私はいつまでも忘れないでしょう。



—6・15後の大学風景—

「守る会」ソウル駐在員 東昇平

周知の通り6月の南北頂上会談以来、朝鮮半島の対話・和解ムードは続いている。ここ、ソウルでは北朝鮮の歌謡曲を携帯電話の着信メロディに使う若者が目に付いたり、大手百貨店ロッテデパートでは金正日の人民服に似せたスーツが売り出されたりと、北朝鮮ブームは相変わらずだ。



大学の研究機関でも北朝鮮ブーム

その動きに応じて、北朝鮮研究に力を入れてきた各大学が、新聞社や企業体と手を結んで対北投資セミナーの開催や新課程の導入を図っている。例えば、9月には慶南大学北韓大学院は全国経済人連合会、中小企業協同組合中央会、および中央日報と合同で「民族共同体指導者課程」を設立し、政府機関や言論界で活躍する指導層人士に高い水準の北朝鮮事情や統一政策に関する教育を始めた。同様に10月には東国大学北韓学研究所は朝興銀行、国際経営研究院、および毎日経済新聞

社と合同で「南北経済協力専門家課程」を開講する。

いずれも、北朝鮮研究では著名な研究機関たる大学が、財界、新聞社と結合して時流に乗ろうとしているものである。

それに対して、大学キャンパスでは「米軍撤収」や「国家保安法撤廃」を叫ぶ垂れ幕が並んでいる。もちろん、これら学生運動の流れを受け継いだ学生会に所属する大学生は一部である。

日本の大学生同様、現在では韓国でも学生の「無関心」が問題となっているが、それでも一般の韓国学生の政治熱は高く、酒の席でも南北頂上会談の成果について各自の意見を述べる人が多い。頂上会談の評価はおおよそ肯定的であるが、懐疑的に考える学生もいる。しかし、問題は時勢を判断するための材料が非常に乏しいことである。

金大中政権が言論統制

ソウルに駐在する日本人記者達が一様に口にするのは、金大中政権になってから言論統制が厳しくなった、ということだ。ご存知の方も多いかと思うが、現在の韓国の各言論機関は大幅な赤字経営のために、金大中の太陽政策に反することは、まず書けないというのである。現在の政権に正面から逆らうような記事を書けば政権が銀行に圧力を掛け、それにより融資が滞ればすぐにも当該言論機関は倒産してしまうというのである。

それらを考えると、学生達が情報を得る場として重要なのが意外にも大学の講義内容にあるようだ。実際に、韓国国内の多くの大学で「北韓政治論」や「南北関係研究論」などの北朝鮮や統一

問題に関する科目が準備されている。学部の講座においては南北分断の経緯に始まり、北朝鮮の金日成体制形成への過程や金正日登場の背景、金大中の太陽政策等を概観的に解説している。大学院の授業では北朝鮮で発刊された主要な原典、例えば『朝鮮労働党歴史』等の書籍をコピーし、テキストとして使用している。従来、韓国で北朝鮮研究が発展しなかった主たる理由として、北朝鮮の一次資料が自由に閲覧できないことが挙げられていたが、現在は比較的自由になったようだ。無論、平壤から北朝鮮の書籍を取り寄せたり、東京で購入してもそれを韓国に持ち込んだりする学生は皆無に近く、わずかに限られた研究者（大学教授等）が原典を所有する程度である。

「北韓学科」を開設している大学も多くなってきた。今年には東国大学が初めて後期博士課程を開設して話題になった。また韓国のワセダと呼ばれる高麗大学においても近年、北韓学科を開設して注目を集めている。これらは韓国政府、特に統一院のバックアップを受けている。1997年に設立された北韓研究学会は、それまで北朝鮮研究に力を注いできた東国大学の教授陣が中心となり設立された学会であるが、現在では200名を超す研究者を会員に擁するまでとなった。昨年には同学会が、韓国国内における北朝鮮研究の動向を纏め上げ、『分断半世紀北韓研究史』（ハンウルアカデミー）という本を発刊した。同書は政治、外交、行政、観光、貿易、言語等、24の分野にわたって北朝鮮研究の現況と課題を述べることに成功し、国内で高い評価を受けた。今後、北朝鮮研究を進めていくうえで不可欠の書となろう。なお、日本においても現代の朝鮮半島問題、特に社会科学系の研究者を中心とした学会として、現代韓国朝鮮学会が11月に設立される予定だそうである。

尊重されない脱北学生の声

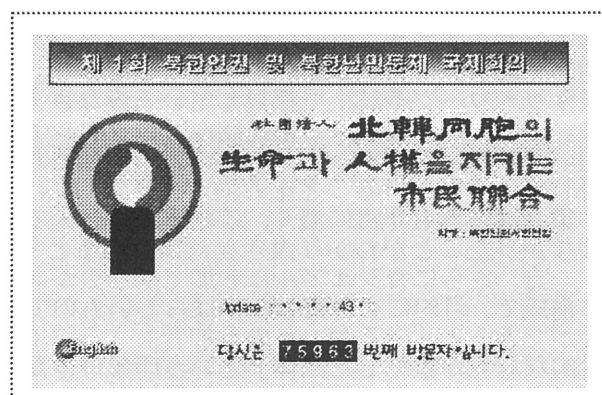
話題は少し変わるが、韓国では北朝鮮から韓国に逃避してきた人のことを「脱北者」と呼んでいる。脱北者の青年達は大部分、ソウルの私立大

学である延世大学に入学している。彼らの多くは、北で金日成革命史や主体思想を中心とする偏った教育しか受けられなかったため、英語などの外国語領域のみならず、現代世界の実相など社会科学の基礎的な知識さえ欠如している。そのような彼らを受け入れる大学は多くなく、進学先は門戸を開いている限られた大学になってしまうのである。

韓国の大学生は彼らの声も聴くべきなのだろうが、残念ながらそのような機会はなかなかない。どうしても限られた情報の中で南北統一や北朝鮮に関してイメージしながら、議論を形成しているように見える。

今回は、脱北学生のインタビューをソウルからお伝えしたい。

以上、韓国における北朝鮮研究の動向を中心に「北韓学科」や学会設立の動きをご紹介させて頂いたが、なによりも、これら、北朝鮮を客観的に研究する動きに伴い、「守る会」のような人道的運動もより一層活性化されることを心より望むものである。

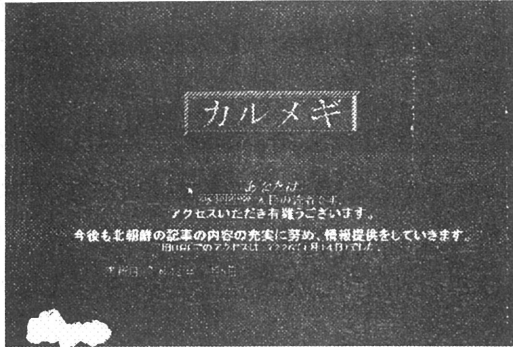


北韓同胞の生命と人権を守る市民連合HP
http://www.nkhumanrights.or.kr/k_index.html

読者の広場

読者・会員の声を「かるめぎ」に反映させるため「読者の広場」ページをつくりました。ご意見、ご要望など気軽に投稿して下さい。氏名は、ご要望により伏せさせていただきます。(編集部)

カルメギ・ホームページ掲示板・落書き帖より



受信日：2000/09/14 Name：N・O

いつもながら拙い文章で失礼致します。

メールを有難う御座いました。里帰りに対する当局の対応になにかすっきりしないものが感じられた由、当局の説明がほしいですね。

ところで、受験の件合格が待ち望まれますね。その暁には、自分がのり込んで変革してやるというような考え方のほうが、いいのではないのでしょうか。千載一遇のチャンスを逃すことのないようにしてもらいたいです。「大事の前には小事を省みない」という言葉がありますが、とにかく重要な人生の選択です。慎重にも慎重を期すべきと思います。

老婆心からくれぐれも申し添えました。

大雨の件、心配下さり有難う御座いました。結論として被害なしということをと、りあえず報告しておきます。又、詳しい連絡もあるかと思ひます。

(管理者：福本正樹)

一昨日、成田空港まで帰国妻を迎えに行きました(共同代表の小川先生任と金民柱様と3人でした)。往復交通費が、かなりかかったのが痛いですが、詳しくは、「落書き帖」に書かせて頂きましたが、空港公団の人たちの横暴なやり方は疑問に思いました。

私も今年受験したのですが、外務省のキャリアと思しき役人までもが私達の行動に思案顔だったので、仮に試験に合格していても行くのを止めようか、とも考えざるを得ません。

それに警視庁の私服警官と思われる怪しい人物が張り付くなどものものしい雰囲気でもありました。詳しくは 16、17 日の集会で小川先生や金民柱様から報告があるかと思ひますが、以上、取り敢えず私の感想を報告させて頂きました。

ところで、金国雄さんのお家がございませう愛知県の方は大変な大雨が降ったそうですね。大丈夫でしたか？ 私も実は名古屋生まれでして、母方のおばあちゃんが椋山女学園という学校のそばに住んでいるのですが、川が氾濫してもう少しで冠水するところだったそうです。

呉々も自然災害や病氣、事故にお気を付け下さいませ。

受信日：2000/09/17 Name：Y・F

こんにちは。守る会のFです。

メールを有難う御座いました。協力してやっていきましょう。(管理者：福本正樹)

16日、東京で行われた集會に初めて参加しました。入會に際してお電話でお話をした小川代表、著作を読んでからお目にかかりたいと思っていた萩原代表(新進気鋭の、目つきの鋭い方と勝手な印象を持っていたのですが、非常に穏やかでユーモラスな方だったので驚きました)をはじめ、守る会の方々と初めてお会いできたこと、大きな喜びでした。当日会場にいらしたであろう金国雄さんをはじめ、かるめぎネットワークや誌上で拝見しているみなさまにご挨拶差し上げられなかったこと、残念に思っています。また、朝日放送系の番組制作プロダクションの石高プロデューサー(?)でしたか、北朝鮮問題を追いかけているジャーナリストの方も出席されており、ジャーナリストの中にも「守る会」の動向に注目している方がいることを力強く感じました。

集會は内容も非常に濃く、これまでは一人で考えていたニュースについての印象が、私一人のものではなかったことがわかり大きな喜びを得るとともに活動の重要さを再認識いたしました。

一方、さらにカジュアルに参加できる会があれば…とも思いました。今回の集會はもちろん非常によい構成で、目的にも合致したすばらしいものでしたが若い人や主婦が気軽に集まれるようなタイプの集會ができると「守る会」への参加者もさらに増え、しかも「特定の人間の少数意見」ではなく「広く一般的な意見が集結した団体」という印象付けができるのではないかと考えました。カルチャーセンターではありませんが、そのぐらい気軽に、この重たい問題を考えることができるようなスペースがあればと思ひました。


集會終了後は、我が家の『お食事当番』のためすぐに帰宅せねばならなかったのが残念です。懇親会で、みなさんの印象や忌憚のないご意見なども聞きたかったので次回の集會の際には、ぜひ懇親会に参加したいと思います。

やっと幽霊会員を脱したのを期に、これから積極的に「守る会」に関わっていきたく思ひますので、みなさま、よろしくお願ひいたします。

帰国者からの手紙

<帰国者の惨状 一家みな病に伏す>

帰国者の甥から日本の叔母へ8月はじめに届いた手紙



 오빠님 안녕하세요
 어머니와 함께 오빠님을
 생각합니다.
 오빠님한테서 보내준 돈과 짐을
 받았습시다.
 여기에 올때에 어머니가 앞은몸으로
 힘들게 왔는데 이모님 소식도 듣고
 얼마나 기뻐하는지 모릅니다
 이번에 어머니가 왔고 가족의 모두가
 앞기 때문에 어머니가 돈이없어

おばさん お元気ですか
 母と一緒に今日〇〇に逢いました。おばさんが送っ
 てくれたお金と荷物は受取りました。こちら(注:平壤)
 に来る時、母が病んだ体で苦勞して来ましたが、おば
 さんの消息を聞き、どれ程喜んだかわかりません。
 このたび母が悪い家族皆が病に伏せっているため
 に、母にお金がなくつらい思いをしている時助けてく
 ださい、本当にありがとうございます。私も肝炎を患
 い、大きい姉さんも商売をしていましたが、失敗し困
 難におちいり、家中が本当に大変な時、おばさんが大
 きな助けをくださいました。
 これから荷物を送る時は、着古した服は送らず安い
 服でも新しいのを送ってくださいとありがたいのです
 が。私たちのためにあまり気づかないなされず健康でい
 て下さい。


(編集部注釈)

手紙の送り主は帰国二世で32歳。宛先の「おばさん」というのは在日の54歳の女性。この人は今長期療養中であるが、北の家族を思い援助している。「母」とはこの女性の姉で1960年に地上の楽園の宣伝に乗せられて一家四人で北朝鮮に渡った。

「大きい姉」は42～3歳。一家の大黒柱で日本から送られてきた品物を売って家族をささえてきた。昨年までは面会申請をしても手紙にも「遠くに行っている」と4～5年消息はなかった。昨年初めに家に戻ったよう。収容所に入れられていたとも思われる。今は病いで家で伏せっている。

「古着はだめ」というのは北朝鮮当局者が数年前からとっている政策。帰国者から取りあげて中国などへ転売して外貨稼ぎをしているとみられる。しかし帰国者の多くからは赤ん坊のオムツもないので、どんな古い物でもいいからおくってほしいとの切実な手紙がひんぴんと届いている。

この在日の「おばさん」もごく最近、北の家族に送る荷物を数個準備したが古着が入っているという理由で送れなくなり大部分処分された。



 안사까치 할애 도와주어서
 정말 고맙습니다.
 나또 친연때문에 왔고 큰누님도
 장사를 하다가 실패하여 큰난을 당하고
 집안이 정말 어려울때 이모님이 크게
 도와 주었습니다.
 앞으로 짐들 보낼때 앞은몸은 보내지
 말고 값있는 옷이라도 새것으로
 보내시면 고맙겠습니다.
 우리들 때문에 너무 생각하지 말고
 건강해 주십시오
 성일 동리

<人権年表> 『日朝国交正常化交渉と人権の動き』(2000年7月～9月)

2000年(7月)

- 8日 平壤放送は、北朝鮮の非人道的人権政策を批判し続ける朝鮮日報の報道について改めて「言論の自由の問題ではなくて、反民族的、反統一的な犯罪行為である」として「(暗礁は)爆破し無くしてしまえ」との評論を伝えた。
- 11日 朝鮮日報は「朝鮮日報はてなづけられない」と題する反論を掲げた。「われわれは言論の自由と北朝鮮当局の歓心のどちらかを選択しろというなら当然、言論の自由を選択する。朝鮮日報は「いかなる脅迫にも屈しない」と強調した。
- 13日 主要国首脳会議(沖縄サミット)外相会合は「総括文書」と「紛争予防のための主要八カ国宮崎イニシアティブ」を採択、北朝鮮に対しては「安全保障、大量破壊兵器の不拡散、人道および人権の諸問題をめぐる国際的な懸念」の存在を明記した。
- 19日 平壤発のイタル・タス通信によると、プーチン露大統領は平壤の迎賓館で金正日総書記と首脳会談を行い、日米が共同開発を進めている「戦域ミサイル防衛(TMD)」と、米国の「国土ミサイル防衛(NMD)」に反対する共同宣言に調印。
- 26日 河野洋平外相はバンコク市内のホテルで北朝鮮の白南淳外相と初の外相会談を行った。8月21日から25日まで日朝国交正常化交渉の東京開催で合意。両外相は日朝間の過去を清算し、新たな善隣友好関係を樹立することなどを盛り込んだ共同声明に署名した。
- ・韓国の李廷彬外相は同市のホテルで白南淳外相と初の南北公式外相会談を行い、対外関係や国際舞台の場で相互協力を進めることなどをうたった共同文書を発表。
- 28日 朝鮮中央通信は「朝鮮赤十字が最近、二人の日本人行方不明者を確認し、その資料を日本赤十字社に渡した」と報じた。中川秀直官房長官も午前の記者会見で事実を認めたが、氏名や詳細については公表を控えた。該当者は在日帰国者の模様。
- ・ASEAN 拡大外相会談に出席のため、タイを訪れたオルブライト米務長官は、白南淳外相と初の米朝外相会談を行った。双方は「歴史的一歩」を強調した。
- 31日 ソウルで行われた韓国と北朝鮮の南北閣僚級会談が6項目の合意内容を盛り込んだ共同発表文を発表して終了。①板門店の南北連絡事務所を8月15日から再開②全民族的行事の再開③朝鮮総連の故郷(韓国)訪問④南北をつなぐ京義線の復元等。

2000年(8月)

- 8日 東亜日報と朝鮮日報は社説で、国家情報院が北朝鮮亡命者に対し「マスコミのインタビューに応じないように」「南北首脳会談の結果については『良かった』と答えるよう」などと指示している点につき「活発な討論による国民的合意が望ましい」(東亜)「民主国家の憲法精神に反する」(朝鮮)と政府の言論統制を批判。
- 11日 北朝鮮を訪問中の韓国メディア社長団は、北朝鮮報道機関との間で「民族の和解と団結のために相互の批判報道を中止する」との合意に達し共同合意文を発表。
- 13日 北朝鮮訪問から戻った韓国報道機関の社長訪問団は、北のミサイル開発について、金総書記が12日の平壤で行われた昼食会で「米国がわれわれにテロ国家の帽子をかぶせているが、これだけ取り除いてくれるならば、即座に修好をする」と述べたことを明らかにした。ミサイルのイランへの輸出も認め「私の力は軍事力からでている」と述べ強盛軍事大国路線に変化のないことを示唆、ミサイル開発の継続も示した。
- 15日 南北朝鮮離散家族各100人がソウルと平壤を北朝鮮の航空機で相互訪問し、ソウルでは午後、韓国総合貿易センターで肉親と涙の対面をした。再開は15年ぶり。
- 22日 河野洋平外相は、日朝国交正常化交渉のため来日中の鄭泰和大使ら北朝鮮代表団と外務省飯倉公館で会談し、日本人拉致疑惑解明に向けた調査の強化などを要請。

- ・公館前では拉致被害家族ら約10人が「拉致問題棚上げ反対」と横断幕を張り抗議活動をした。河野外相は会談で「拉致被害家族は大変な思いをしており、その気持ちを踏まえなければならない」と述べた。大使は「拉致は存在しない」と否定。
 - ・同日から始まった日朝正常化交渉の本会議は、日本側代表団の高野幸二郎大使と北朝鮮代表団の鄭泰和大使の双方が早期正常化を目指すことで一致した。
- 24日 日朝国交正常化交渉は木更津市のホテルで本会談を行い、日本は「過去の清算」は「日朝が当時、交戦状態になかった」として財産・請求権として処理すべきと主張。拉致問題、弾道ミサイル開発、工作船侵犯など双方に横たわる諸問題を提起した。北は食料支援に謝意を表明、他は、「拉致はありえない」「ミサイル開発・輸出はどの国でも認められた自主権だ」「(工作船は)断固として否認する」と否定。
- ・韓国の「拉北家族連絡会」は大統領府を訪れ、金大中大統領宛に肉親の救出を求める書簡を提出。拉致問題を南北閣僚級会談の議題にと家族の生存確認を要望。
- 25日 韓国の金泳三前大統領は、金大中大統領の対北政策を「広範な国民的支持と同意を得ていない」と批判、南北首脳会談の合意事項についても「自由民主の基本秩序に立脚した統一、と規定した憲法に違反している」と非難。「北は歴史上、類を見ない共産独裁国家として住民を抑圧してきた。北はまったく変化していないのに、われわれ南だけ変化している。私は統一は望むが、共産統一は望まない」と表明。

2000年（9月）

- 1日 南北第2回閣僚級会談は共同文書を発表した。軍当局者の会談開催の可能性を盛り込んだ。他の合意事項は①離散家族の訪問団交流を年内に後2回行う。②投資保証、二重課税防止など制度的な装置を作る③南の、山と北の開城の道路建設一など。
- 2日 韓国でスパイ容疑で捕まり、政治的思想転向を拒否して服役した北朝鮮の非転向囚63人が韓国から北に送還された。日本人拉致犯の辛光洙元服役囚(71歳)も含む。
- ・韓国の国家情報院は、北朝鮮に捕虜として抑留されていた元韓国兵と拉致被害の漁師など8人が、98年に北朝鮮を脱出、第三国経由で韓国に帰還したと発表した。内訳は朝鮮戦争の捕虜5人、残るは漁師一家。家族・氏名など詳細は発表しなかった。5人は咸鏡北道の炭鉱で働かされ、漁師一家は咸鏡南道の造船所で働いた。
- 8日 金泳三前大統領は記者会見で、民主主義を守る国民総決起集会の開催と金総書記の反民族的犯罪行為を糾弾する『二千万人国民署名運動』の展開を表明。前大統領は「金正日は韓国を赤化統一する野望は捨てておらず、まったく変化していない。金大中は一方的な北ペースについていくだけの屈辱的な姿を見せている。」と批判。
- 15日 1948年の南北分断以来初めて、韓国と北朝鮮の選手団がシドニー五輪の五輪スタジアムで合同入場行進を行い、南北和解の動きを印象づけた。
- 16日 「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」は渋谷区勤労福祉会館で緊急集会『日朝国交交渉と北朝鮮の人権』を開き、萩原遼氏、明治大学講師の川島高峰氏、戦後補償問題専門家の谷川透氏がそれぞれ講演した。日本に滞在許可を求めて裁判係争中の北朝鮮亡命者の金龍華氏が北朝鮮の非人道的体制を批判する講演を行った。また北朝鮮に渡った在日帰国者9万3000人全員の早期里帰りなどを求める決議を採択。
- 23日 森喜朗首相は韓国の金大中大統領と熱海市内のホテルで会談した。大統領は永住外国人への地方参政権付与について法案の年内成立を求めたが、首相は「国の根幹にかかわる制度」として、法案の成立については慎重な姿勢を示した。
- 24日 森喜朗首相は金大中大統領と熱海市内のホテルで朝食をともにした。大統領は北朝鮮への大規模コメ支援を要請。首相は「支援を検討」とだけ述べ、即答をさけた。

(佐伯浩明：運営委員)

詩 二篇

小野美智子

『望郷』 ぼうきやう

飛べばひと飛びの近き国

閉ざされし歳月の戻らぬなら

せめて会わせよ母と娘を

夢にまで見た故国にて

訃報を聞く娘の悲しさよ

国情に翻弄されし里帰り

何故に阻むか北の国

皆に等しくある時間を

取り上げられし帰国者の願いを罪となす国よ

一日も半日たりとも忘れえぬ

父子母子は山ほどに

今度こそ今度こそ

念じ続けて声はか細くなるばかり

望郷よ再会よ願ひよ届け

それぞれに老いて待つ身の哀れさよ



『伝説の舞姫』

在りし日に美貌の舞姫

朝鮮の露と消へたり

崔承喜のドキュメント観て胸ふさぎ

悲しき怒りこみ上げる

人命を軽んずる国 栄華なく

文化の火を消し彷徨うか

もう二度とあれほどの才媛生まれまい

民族の象徴なりて更に言う

偉大というなら彼女なり

朝鮮の世界の宝を根絶やしに

凍土の国は何処へ行く

「いろいろ聞いて」

聞き手・金 国雄

守る会はだれもが集え 気楽に語れる会に なっただけ

ジャンボ・Wさん（仮名）

ボタ山や朝鮮部落が点在し差別と貧困が同居した九州のある町で生まれ、少女期を朝鮮学校に通う音楽好きな子どもとして過ごしました。それは当時、多くの在日子どもにも共通する生き方でもありました。

その後も総連組織と長く関わって来ましたし、何回か北朝鮮にも行き、この目で見てきたこともあります。そして今でも友人の多くが総連におります。

— 守る会と関わるキッカケは大阪での講演会 —

三年程前、大阪での講演会を聴きに行った折り、朴春仙さんに声をかけていただき知り合いになった事がキッカケでした。それまでいろいろと知らなかったことや今までに疑問に思っていたことなどを金英達さん、萩原さんをはじめ、多くの方々のお話を聞き、また目にする事によって真実を知るにつけ、自らの幸せを求めめるだけではなく多くの人たちの幸せや真に祖国の為に、私にできることで何かお役に立てることができたらというささやかな思いから会員の一人となりました。

— 「要望」は、各団体が力を合わせることに —

ただひとつ残念に思うことに、いろいろな団体がある中、皆さん北朝鮮の人たちを救いたいという同じ思いで活動を行っていると思うのですが、各団体がお互いにもっともっと力を合わせ一緒に運動を發展させていただけたらと、思います。

「守る会」としては、老若男女誰もが気軽に集会や講演会に出かけられまた、手紙などでも意見や要望などを気楽に言え、関わって行けるような「会」になっただけと思えます。

— 北朝鮮のすべてが「悪」ではない —

「総連」は、信頼され尊敬される組織に —

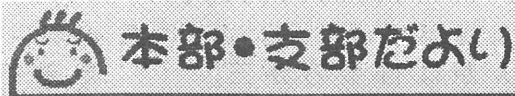
北朝鮮に関しては全てにおいて「悪」という事がともすれば言われます。私は、そのことに対しては賛成しかねるのです。しかし、そんな私も総連が、北朝鮮の出先・下請け機関としての組織ではなく、同胞に立脚し在日社会に貢献し、同胞から信頼と尊敬を得られる組織に早く生まれ変わって欲しいという思いを持っています。その為にも指導部の世代交代が進み思想的に柔軟な若い人材が登用されるのが肝要なのではないかと思えます。

— 「夢」は、北の友人と一緒に統一を祝って歌うこと —

私は子供のときから歌を歌うことが好きでしたので、祖国が統一された暁には、北朝鮮にいる友人と一緒にその事を祝って歌いたいと思っています。

今後とも宜しくお願いいたします。

<東京本部>



—10月12日運営委員会だより—

■ 講演会のお知らせ

講演会

**「南北頂上会
談への大い
なる疑問・
帰国事業
と朝鮮総連の
責任」**

**日時：12月1日
（金）
午後6時**

**会場
渋谷区勤労福祉会館
第2集会室
（渋谷山手教会前）**

**講師 金民柱氏
（守る会共同代表）**

- 姜哲煥さん一家と強制収容所に関するピエール・リグロさんの本『ピョンヤンの金魚鉢』（仏語）が出版されました。リグロさんはソウルに一週間滞在して姜哲煥さんにインタビューして書き上げたと言います。
- 第2回ソウル国際シンポジウムが12月8日にあります。今年のテーマは「脱北者支援」です。ヨーロッパの知識人、このほど北朝鮮の人びとを支援するヨーロッパ委員会結成で声明。

<これまでの署名>

韓国の大統領と北朝鮮の独裁者との6月13日から15日までの頂上会談で、我々に北朝鮮の人びとのおかれている悲劇的な状況を忘れさせてはならない。15万の人びとが収容されている強制収容所、公開処刑、唯一思想の強制と過去五年間に飢餓で亡くなった200万もの人びと、北朝鮮は現代の地球上で最も犯罪的な国家である。

しかし、この会談がもし北朝鮮の人びとの支援の上で現実的な活動に道をつけるならば、それは無駄ではない。不幸にして、そのような目的を達成するための支援に参加するこの地域の国を今は一つも期待できない。ロシア、中国、米国、日本、そして韓国でさえも、北朝鮮の人びとの苦しみを終らせる唯一の道として残された南北統一をさまざまな理由で現実には促進していない。この統一は、世界の世論次第である。

我々は、北朝鮮の人びとを支援するためにヨーロッパ委員会の結成を示唆したい。その第1の目的は、世界の医師団(MDM)や国境なき医師団(MSF)やアクション・アゲンスト・ハンガー(AAA)という非政府組織の独立した団体による食料や医療支援物資の配布管理を北朝鮮に受け入れさせること。それらの団体は今、支援をストップさせられている見捨てられた人びとのために介入できる支援が北朝鮮の特権層に向けられているのを彼らが防ぎきれないからである。

第2の目的は、平壤の政権に北朝鮮の人びとが国境を合法的に安全に越える権利を認めさせることである。我々の意見ではそのような支援物資の配布の管理と北朝鮮国民の自由に国を離れる権利は、北朝鮮への援助の継続には、まさに絶対の必須条件である。

第3の目的は、北朝鮮国民の自由への奪えない人権の尊重に向けて活動する一方、逃亡できる人びとのために政治難民の地位を獲得することである。彼らは北朝鮮に送還されても、当局に引き渡されてはならない。

ルドヴィコ・ベドナール(チェコ) アレン・ブザンソン(フランス) アンナ・ブランディアナ(ルーマニア) ステファン・クルトイス(フランス) ジャン・リュク・ドメナチ(フランス) アントニオ・エロルザ(スペイン) ウィリ・フォートル(ベルギー) アンドレ・グリュクスマン(フランス) カール・ハフェン(ドイツ) マリー・ホルツマン(フランス) ドラホスラヴァ・ジャンデロヴァ(チェコ) ビーター/ピエール・ケンデ(ハンガリー) ジョエル・コレク(ベルギー) ルドルフ・クセラ(チェコ) アタナシウス・パパンドロポウロス(ギリシャ) ロバート・ペビン(フランス) アンリ・ブラグノール(フランス) サビネ・レナート・サブロニエール(フランス) ジャン・フランソワ・レヴェル(フランス) ピエール・リグロ(フランス) アンドレ・セニク(フランス) バーバラ・スピネリ(イタリア) ペトルスカ・スストロヴァ(チェコ) ミカエル・タウブマン(フランス) ギュイ・ティシエール(フランス) フランソワズ・トム(フランス) オリヴァー・トッド(フランス) アレキサンダー・トムスキー(チェコ) カンディダ・ヴェンツラ(ポルトガル) ミカエル・ヴィックマン(ドイツ) イリオス・ヤナカキス(フランス)

< 関西支部 >

9月9日、第13回関西支部講座を開き、「米国取材報告アメリカの北朝鮮戦略と南北首脳会談」と題して萩原遼さんから4ヵ月間のアメリカ取材生活にもとづく報告を、エピソードを含めて面白く、興味深く語っていただきました。

南北首脳会談後、今度こそ待ちわびた「南北和解と統一」の時が来たと喜ぶ人々の姿が各地で見られましたが、その期待が裏切られることのないように願いつつも、萩原さんは今回の南北会談が昨年のペリー報告によって示されたように、米国

が金正日政権を崩壊させず支えることを明確にしたことで、金正日は安心して金大中大統領を迎え入れるとともに、獲得できる限りの経済援助を引き出し、政権基盤を強化しようとしていることなど、北の民主化と人権問題の改善には決して樂觀できないことを強調しました。

時の話題の焦点でもあった南北首脳会談の評価を巡る時宜を得た講座でもあったため、60名ほどの参加者を得る盛況でした。質疑も尽きず、2次会も20名を超える参加者で賑わい、3次会まで議論をつづけ、親睦を深めました。関西のあたたかい庶民性に満ちた楽しい一日でした。

第14回関西支部講座のご案内

吉林の新聞記者が見聞きした

北朝鮮と脱出者の現在

講師 延 日さん

■日時 2000年 11月25日(土) 午後2時～5時

■場所 大阪経済大学 G館 G33教室

大阪市東淀川区大隈2-2-8

大阪市バス 井高野車庫行き 大阪経大前下車すぐ

(大阪駅前、扇町、天神橋筋五丁目、天神橋筋六丁目などで乗車できます。)

阪急京都線 上新庄駅下車 徒歩10分

< 東海支部 >

三重での懇親会

親睦を図る「懇親会」が8月26日、三重県で行われました。事務局3名を含め7人と少数でしたが、東海支部としては記念すべき懇親会であつと信じています。

また今回の大水害に対しましてもお見舞いの言葉をいただきました事にお礼を申し上げます。幸いにも私が知る限り支部関係者に被災された方がおられなかった事が幸いでした。また、今回の鳥取西部地震の被災者の皆様におかれましてもお見舞い申し上げます。 金 国雄 拝



東海支部の初めての懇親会を8月26日、残暑厳しい中、三重県で行いました。

メンバーは、先ごろ亡くなられた金英達さんのお姉さんの玉川富江さん、弟さんの大野時成さん、大野さんの職場の同僚の北野信義さんなど4名と、東海支部事務局3名の計7名で出かけました。

まず会場のお店がすごく立派だったことに驚きました。数々のごちそうを前にして話もはずみ、英達さんの思い出話や朝鮮総連のこと、そして北朝鮮の現状や南北首脳会談などの意見・情報など交換し、大変有意義な時間をすごすことができました。そして次回にでも関西支部などと合同で懇親会を開くことができると話しながら帰路につきました。

東海支部は、今後もこういった懇親会を各所で開きたいと思っております。ぜひとも皆さんの参加をお待ちしています。あと、ぜひ家へも来てほしいというご希望がございましたらご連絡くだされば可能な限り出かけていきますのでよろしくお願ひします。



ジャンボ

懇親会ご苦労様でした

東海支部の事務局長始めスタッフの皆様、26日は、本当にありがとうございました。記念すべき、東海支部の懇親会は大成功だったと思います。和気あいあい、いいお話もたくさん聞く事が出来、お店もゴージャス、料理は美味、初対面の方々は、皆いい人で安心しました。



顔合わせの計画、当日の会の進行、ご苦労様でした。我が事務局長金国雄さんは、お酒に酔っても純真な所が新しい発見でした。

私もいろいろ大変でしたが、無事に東海支部の懇親会を終了する事が出来てほっとしました。私も年は争えず五月から突っ走って来て、少しひと休みする事が出来ました。スタッフの皆様には、くれぐれも感謝の意を伝えて下さい。玉川 富恵

自己紹介

自己紹介をしなくてはと思いつつ、東海支部に入会させて頂きましてから1カ月が過ぎてしまいました。その間、新入会員の私に出来ることは、少しでも多くの北朝鮮に関する書籍を読み、幾許かの知識を得ることと思ひ手当り次第、読むことに専念致して参りました。

読めば読むほど辛く悲しい北の民衆の実情、知れば知るほど読む者を苦しみの中に引きずり込む悲しい知らせ、私はかつてこの様な本に出会ったことがありません。

今年の5月5日から今日までの3カ月、私の感じたこと等思いつくまま書き、投稿させて頂くことで自己紹介とさせて頂きます。

「守る会」入会の経緯は金英達さんの事件が発端でありました。英達さんの実弟、時男さんとは同じ職場の働く仲間です。彼からポツリ聞かされたこの事件がきっかけに私は、インターネットで勉強を始めたのでした。

他に、入会を決意した事がありました。それは子供のころ朝鮮人差別の苦い思い出があり、それをそのままにしているはいけない、謝罪するよい機会と思うからです。

もう、50年も前のことです。私の村は伊勢湾に面した半農半漁の村で、小さな入り江が村のゴミ捨て場になっていました。このゴミ捨て場の一面にトタンと板切れで建てた粗末な小屋があり、潮が満ちて来ると海水が押し寄せ小屋は孤立状態になってしまう様な所なのです。

この家に在日の家族が住んでいたのです、何人家族であったかは記憶にありませんが、ひとりだけ鮮明に憶えています。その家族の中に髪が真白になったお婆さんがいました。彼女は真白なチョゴリを着て先の反り上がった白い靴を履き、ほろほろになった乳母車を杖がわりにし、顔には幾筋もの深い皺がありそこに鋭い目がある人でした。

私が7つか8つのある日、私たち4・5人の子供はこの老女を見つけ「ヤーイ朝鮮人」と囁し立てました。50年前のことです、すでに天に帰られたであろうあの時の老女と、私の天の神様に許しを乞い新たな気持ちで北朝鮮と向き合っていくたいと思います。

北野信義

**「東海支部
学習会と忘年会」**

**学習テーマ
「保国事業」**
(仮題)

講師：梅村雅英
(東海支部資料調査委員)

**時：12月20日(土)
午後一時より**

場所：三重県

参加費：三三〇〇円

※要予約(金国雄まで連絡を)
※乗り合わせて行く予定です。

ニュース

<チョ・ヘンさんが坂本義和氏に抗議文>

- 朝鮮時報8月11・25日合併号に掲載された「坂本義和氏に聞く日朝交渉で謝罪と賠償に取り組むべき」との記事中の坂本氏の発言、「…先日、横田めぐみさんの両親が外務省に行って、まず、この事件の解決が先決で、それまでは食糧支援をすべきでない」と申し入れた。これには私は怒りを覚えた。自分の子どものことが気になるなら、食糧が不足している北朝鮮の子どもたちの苦境に心を痛み、援助を送るのが当然だ。それが人道的ということなのだ。…」などに対し、9月23日付けでチョ・ヘン（帰国者家族）さんから

「第1に、過去の侵略の問題は、それこそ過去において日本がなした事であって今現在、日本が北朝鮮を支配しているわけではありません。そして、横田めぐみさんたちは今もお、人生を踏みにじられ、自由を奪われ、肉身の方々と会うこともできずにいるのです…。私はコリアンという立場を超えて、それこそ『人道的に』過去の問題よりも今現在、拉致疑惑問題の解明を強く要望し一日も早く無事に家族の元に戻れることを強く願っています。

第2に、補償金を北朝鮮が受け取り、国交が成立した後、この拉致疑惑問題が必ず解決できるという補償はどこにあるのですか。」

などの理由で坂本氏に抗議文を送った、との連絡が三浦小太郎さん（RENK 東京）からありました。なお三浦小太郎さんは、東北大学の大学院生で日本人妻の小池秀子さんと、1962年に北朝鮮に渡り、その後アムネスティ報告によるとスパイ容疑で逮捕され、夫婦で脱出を図ったために子どもたちとともに銃殺されたというチョ・ヘンさんの兄浩平さんの日本の家族に出された手紙を『北朝鮮の闇に消えた若き科学者と日本人妻チョ浩平・小池秀子書簡集』として編集出版している。

<原さんを拉致した辛光洙を北朝鮮に送還>

- 中華料理店コックの原さんを1980年に拉致したとされる北朝鮮工作員で非転向長期囚の辛光洙が釈放され、9月2日に北朝鮮に送還された。この辛元服役囚を工作員とは知らず約3年間、日本で一緒に生活したことがある朴春仙さん（9月17日の第3回日本人妻一時帰国に際し「守る会」の活動に参加）が、板門店を通過するバスに乗った辛元服役囚に対し、「原さんはどうなった。逃げるな！」と強い抗議の声を浴びせた。しかし、ほかの非転向長期囚63人とバスに乗り込んだ辛元服役囚は、しっかりと窓にカーテンを降ろし、多数の韓国人支援者たちに見送られて北朝鮮に去っていったという。

<北の態度は信用できないと金龍華氏語る>

- この9月12日から18日まで支援者と福岡から上京し、9月16日の「守る会」集会にも参加した金龍華氏は、滞在中、衆議院の法務委員会の主な議員たちへの特別在留の要請、日本や韓国マスコミの取材など忙しい日程を元気にこなした。同氏は、南北会談については北が政治犯を釈放するか、軍縮を打ち出すかしない限り北の態度は信用できない。日本政府のコミ支援には条件をつけるべきだが、民間支援は息長く行うべきである。民間交流こそ変化のために重要である。

また拉致疑惑については北の政府の立場からいって譲歩は期待できない、日朝交渉の場で拉致という表現を使い北を刺激する場合には、証拠隠滅のために北が被害者を殺害してしまうおそれがある、という趣旨のことを述べていた。



それぞれの夢

佐藤 正明

中日新聞 9月26日より

<要請文を配った相原悦子さんの感想>

- 仙台市在住の会員・相原悦子さんから次のようなハガキが寄せられました。今年5月に永田町の議員会館をまわって日朝議連関係者の一人として松本善明議員（共産党東北ブロック担当）にも配った「守る会」の要請文（34号参照）に対し、同議員の仙台事務所に出向き問い合わせたところ、「こういうものは中央事務所でない」と返事ができない。その後、南北会談があつたりして今さら…」と婉曲に回答を拒否されてしまった、とのこと。

「結局、私たちは何のために要請文を配ったのか、でも、それでもこういうことをつみかさねて実を結ぶのかな、などと思っています」と、相原さん。

- ※ 日本共産党は、朝鮮総連との関係を正常化した、と「しんぶん赤旗」（10月20日）紙上で発表した。（編集部）

アクション・アゲinst・ハンガー、北朝鮮における活動を停止 完全報告書 2000年3月9日



国際的な人道援助組織、アクション・アゲinst・ハンガー（以下、AAHと略称）は今年3月、北朝鮮からの撤退を決定し、その声明をホームページ上にだしています。これは、そのプレス・リリースの全文日本語訳です。



訳者 川島 高峰 (かわしま たかひこ)

1963年、東京生まれ。1997年、明治大学大学院修了・政治学博士。早稲田大学、明治大学講師。著書：『銃後一流言・投書の「太平洋戦争」』読売新聞社（1997）、『敗戦—占領軍への50万通の手紙』読売新聞社（1998）など。

<要約>

栄養失調による最衰弱層への救援事業が実行不能となったため、国際的組織AAHは、北朝鮮からの撤退を決定した。

これは極めて困難な決定であった。AAHは大多数の北朝鮮の民衆が、依然、自分やその家族のため充分な食糧を見つけるのに極めて困難な状況にあると確信しているからである。

1998年1月、北朝鮮における事業が始まって以

来、チームは、最も恵まれていない人々に少なくとも最小限の基本的救援を届けるため、彼らに接触するよう終始、努めてきた。

この2年間にわたりAAHは、咸鏡北道（北朝鮮最北部）にある、五歳以下の子供をあずかる保育施設に対し、栄養補給の援助を行ってきた。

これらの保育施設で、我々のチームは深刻な栄養失調を見ることはなかったが、1998年10月、北朝鮮全域で行った地域栄養調査では、子供の15%が栄養失調に苦しんでいることを示していた。この調査はこれら栄養失調の子供たちが保育施設に来ておらず、おそらくは何の援助もなく死亡している模様との証拠である。

1999年10月、この観察に対処すべくAAHは、北朝鮮当局に対し咸鏡北道（北朝鮮最北部）での給食施設の事業を提案した。これは最も恵まれていない層、ことに道都の清津の路上でスタッフがしばしば目撃した深刻な状態にあるストリート・チルドレンを援助するためのものであった。

残念ながら、北朝鮮当局はこのような事業に際しAAHが通常の基準として行う監督とモニタリング（効果の測定）を許可しなかった。それ故、AAHは、これら人道介入のための極めて基本的な諸原則が遵守され得ない事業を実行することよりは、むしろ北朝鮮からの撤退を選択することとした。

AAHは、国際社会による北朝鮮への莫大な食糧援助にもかかわらず、栄養失調で死亡が続出する最弱層への接触が欠如している点を非難せざるを得ない。

要約

序文と証言

■ 人道支援の必要性

- 1 北朝鮮：漂流する国家
 - 1-1 崩壊状態の経済
 - 1-2 1995年の北朝鮮政府の援助要請から疲弊した国土が明らかとなった。
 - 1-3 膨大な食糧援助にもかかわらず危機的な栄養状態が続いている
- 2 A A Hは北朝鮮に人道的「空間」を切り開くことに努めた
 - 2-1 援助は最も深刻な咸鏡北道にしばられた
 - 2-2 行き詰まり 国家監視の枠内に制約された事業

■ 人道活動の不能

- 1 最も飢えた層への接触は拒絶された
 - 1-1 飢餓層へ配給しない体制を通じた支援
 - 1-2 援助は飢餓に瀕した子供に届かない：「孤児院」の場合
 - 1-3 最飢餓層との接触、その最後の試みの失敗
- 2 人道介入のモニターを認めない不透明性
- 3 監視下の人道活動家
- 4 北朝鮮では「人道的」支援が弱いというより、むしろ「政治的」支援が不足

勧告

結論

序文と証言

1998年1月、朝鮮民主主義人民共和国に向けて出発したA A Hの第一陣は、消耗しきった国を見ることができると予測していた。

- 一 専門家による分析によれば、北朝鮮の経済崩壊は90年代初頭から始まっていた。
- 一 いくつかの調査結果が、内情を知ることが出来ないことが当たり前となっている体制については、おおよそそのこととなるのは避けられないが、この経済崩壊が民衆の大多数に重大な結果をもたらしていることを示しているし、またある調査は、大規模な飢餓を報告している。

北朝鮮滞在中に、A A Hの人道ボランティアはこの経済崩壊と、その帰結が民衆の生活状態にもたらしたものを目の当たりにした。

- ストリート・チルドレン
「毎日、私たちは、ぼさぼさの髪と薄っぺらなボロをまとった汚い子供たちを見た。彼らは時に非常に幼く、3歳から4歳の間であり、独りでして見たところ非常に衰弱している。」
- 生き残りへの民衆の闘い
「朝鮮の人たちは道路沿いに歩き、街路樹の下に座る。時に彼はそこで休憩し、寝ることさえある。人々の日々の生活は食糧を求めることにあり、根菜類や植物を採り、冬の間暖を取るための木を集める」
- 放置された産業基盤
「道路は穴だらけで荒れている。さらに燃料不足のため自動車が走ることは滅多にない。我々が見たわずかばかりの運搬車は木やとうもろこし

の軸を載せていた。首都平壤から清津（チョンジン）までの800キロを行くのに三日間をついやした。」

- 水と電気の不足
「都市では、停電が頻繁にある。公共交通である路面電車やトロリーバスは、しばしば、とまり、利用者は歩道に長い列で待つ。給水もまた一日に何度も中断される……。いずれにせよ、給水量は人の消費を満たしてない。」
- 放棄された産業都市
「咸鏡北道の道都・清津は、何キロにも及ぶ大規模な産業都市である。しかし、工場は閉鎖されたか、あるいは開店休業にあるように見える。煙の出ている煙突は、ほとんどない。このような町で人はいかにして生き残っているのだろうか？」

■ 人道支援の必要性

1 北朝鮮：漂流する国家

1-1 崩壊状態の経済

90年代の初めから、北朝鮮は激しい経済危機を経てきた。北朝鮮の経済は80年代の終わりまでは共産圏、分けてもソ連と中国との特恵的な交易関係に基盤を置いていた。それは輸入、特にソ連の石油と技術に極めて特恵的なレートを認めたものであった。

ソ連の崩壊と中国の経済改革はこの関係を変え、朝鮮の経済は極めて深刻なエネルギー危機に至ることとなった。

機械と肥料に高度に依存する朝鮮農業の生産性は急落したのである。

1-2 1995年の北朝鮮政府の援助要請から
疲弊した国土が明らかとなった。

1995年、北朝鮮政府は、大きな洪水が深刻な食糧不足を引き起こしたとの口実の下、国際社会に支援の要請を行った。しかしながら、その年とそれに続く三年間にわたり北朝鮮がいかに天災に見舞われてきたとはいえ、全ての観察者は天災は食糧不足を悪化させたに過ぎないという点で一致している。実際、食糧不足は1990年代の初頭から続くものであり、当時からすでに農業生産は民衆の必要量を供給することができなかつたのである。1995年の洪水は、たんに北朝鮮の構造的な破綻を明らかにしたに過ぎず、それ以降、政府はそれを隠すことが出来なくなったのである。

現在、北朝鮮の国内総生産は低下の一途にある。その損失は生産システムに回復の見込みがないほど大きなものである。

1-3 膨大な食糧援助にかかわらず危機的な栄養状態が続いている



1995年以来、北朝鮮は大規模な国際援助を得てきた。1999年には、北朝鮮の食糧不足の大部分が、特に国連の世界食糧計画の貢献により北朝鮮への援助が最も重要な事業の一つとしてまかなわれた。

それにもかかわらず、栄養失調は減少してきたとは思われない。1998年9月、世界食糧計画、ユニセフ、ヨーロッパ連合により実施された栄養状態についての調査は、子供の約16%が依然栄養失調に苦しんでおり、それはアジアで最悪の比率であることを示していた。加えて、中国国境地域へ飢餓から逃れてきた脱北者によって悲惨な話が集まっているが、それは民衆の多くの部分がきわめて憂慮される栄養状態にあるとの確信を強めるものである。

他のどのような国とも同様に、「飢餓」状態とは、必ずしも食糧が十分でないためではなく、それよりも、ある特定の範疇の人々が食糧を手に入れることが出来ないという事実から起きるのである。

この文脈から、AAHは北朝鮮に介入を決定した際、二つの目標を設定した。

- 一 飢餓の犠牲者に援助するための手段を確保する方法を見出すこと
- 一 関連事業を徐々に実行できるようにするため、北朝鮮の状況についてより良い理解に至るようにすること。

2 AAHは北朝鮮に人道的「空間」を切り開くことに努めた

1998年1月からAAHは、咸鏡北道における事業に焦点を据えてきた。咸鏡北道は北朝鮮最北部に位置し、経済の沈滞に特に苦しんでいる地域である。その目的は、北朝鮮の子供たちが通っていると推定される保育施設や幼稚園における栄養失調を防ぐための事業を行うことにあった。

2-1 援助は最も深刻な咸鏡北道にしばられた

咸鏡北道は220万人の住民を持つ北朝鮮で最も人口の多い道の一つである。北朝鮮の北部に位置し、中国とロシアの国境に面している。山岳地帯という地形状況が農業に災いし、耕作面積は（全国平均18%に対し）わずか6%に過ぎない。咸鏡北道は必要な栄養量をこの地域の生産だけでまかなえないことが知られている。

AAHの人道ボランティアは咸鏡北道に到着した折のことを、次のように述べている。

「この地域は活気がなく、経済は停滞している。大きな産業都市、道都清津は、いまや漂流している。工場の全てか、あるいはその殆ど全てが閉鎖され、わずか二、三台の車が走っているに過ぎない。木材の集積と運搬が冬の間を通じた主たる作業の一つと思われる。子供を含めた多くの人々が、道路沿いに大きな木の枝の束を運んでいた。薪が唯一の暖房の手段である。北朝鮮の人々は、このようにして森林を破壊し尽くしているのである。」

1999年から2000年にかけて、咸鏡北道は238,000トンの食糧不足に直面した。この地方の農業生産では1日一人当たり170グラムの供給ができるにすぎなかった。

この地方では人口の大部分が市街地に居住しており、その住民の78%が公的配給制度（基本的食糧を民衆に配給していると思われる）に依存している。しかしながら、1999年、この制度は何も配給しなかった。実際、運送が困難なため、昔から北朝鮮の穀倉地帯であった南部の道は、もはや北部の道に供給しなかったのである。それゆえ、咸鏡北道は住民に必要な栄養を満たすために海外の支援に完全に依存していた。

咸鏡北道の人々は生存のための厳しい闘いを行っている。あらゆる土地の区画が、丘陵の上さえもが耕されている。都市住民は、バルコニーでニワトリやウサギを飼っている。地方では市場が急に出現しており、それは明らかに多くの都市住民にとって新鮮な食糧を得る唯一の手段である。これらの市場は人でごった返しているのだから、AAHの人道ボランティアは簡単にその目で確認することができた。しかし、ボランティアは市場を訪れることさえ、決して許可されなかった。というのは、当局はこういった市場の存在を認めることを完全に否定しており、それは北朝鮮の社会主義経済では全く容認できないものだからである。

食糧不足について、そして、最も脆弱な人々へ支援をもたらすという問題への取り組みから、A

AHは子供への栄養支援をその介入の方針とした。

2-2 行き詰まり 国家監視の枠内に 制約された事業

AAHの人道ボランティアは、北朝鮮当局が熱心に受け入れた食糧品の供給のような量的なものだけではなく、水質管理のように検査や訓練を行う質的なことを目的とする事業を開始することも出来た。

1998年並びに1999年に、AAHは保育園や幼稚園への栄養支援事業を行った。人道活動の目的は、1,442箇所の保育園に通う五歳以下の子供で「当局が認める」108,023人、そして同じく1,098の幼稚園にいる五歳、六歳の子供61,741名の健康及び栄養状態を改善させることである。この事業は咸鏡北道で人道組織が行くことを許された12の郡で行われた。

AAHの二人の栄養学者が、保育施設の看護婦や医師、小児病院の医師、保健省の代表に対して基本的な検診方法や、栄養失調への対処について訓練を行った。今日では、この地域の全ての保育園でAAHが供与した身長測定や体重測定の道具を用いてその場で子供の成長を追跡して調べる事が出来るようになった。そして、穀類、ミルク、油、砂糖といった特定の食物を利用して子供を適切に保育することができるようになった。これらもまたAAHにより供与されたものである。

これら頻りに訪れた保育園や幼稚園の衛生を改善するために石鹸、シャンプー、洗濯粉、消毒液といった衛生用品の配布も組織化された。

水質評価の事業

AAHの人道ボランティアは保育園や幼稚園の子供の間で多くの下痢の症例を認めたので、水質管理の事業を整備した。この調査は、咸鏡北道の主要な都市の14の水道網で実施され、給水されている水が汚染されていることが明らかとなった。当局は水を沸かして利用するように指導していたが、燃料不足は人々が直面していた大きな問題の一つだったので、この指導にはたして従ったかどうかは疑わしい。

これらの事業は北朝鮮における人道状況からすれば少しはましな理解を当局から与えられていたが、それでも、AAHの人道ボランティアは多くの機会に出会った最も恵まれない人々と接触することを決して許しはしなかったのである。

二、三粒の米をかき集める

「我々は米が集積される場所で、穂から落ちた一粒一粒の米を拾っている年老いた人々に出会った。」

わずかな粉ミルクをめぐって…

「駅で粉ミルクの積み下ろしが行われていた時のことである。ストリート・チルドレンの子が換気孔の隙間から木の棒で積荷を突いていた。貨

車の下に小さなプラスチックのかけらを(踏み台として；訳者注)置くことで、彼等が穴をあけた荷物からこぼれたわずかばかりの粉ミルクを集めることが出来るのである。またある子供たちは、レールの上に落ちていた粉ミルクを集めていた。我々は化学肥料を運んでいるトラックでも同じ光景を目撃した。多分、子供たちは食糧と勘違いしていたのだろう…」

これは、AAHがその事業を通じ供給を試みた支援も含め国際援助は決して北朝鮮の大勢の人々には達しないとの証拠となった。

■ 人道活動の不能

北朝鮮での二年間、AAHはいく度も繰り返し試みたが、結局、最も困窮した人々に最小限の接触を得ることすら出来ないことを認めざるを得なかった。

1 最も困窮した層への接触は拒絶された

北朝鮮における人道支援事業の展開と実施は当局により完全に統制されている。全ての人道事業は政府の行政機構を通じて実施されなければならない。このことから人道支援の援助を受け入れている枠組みと実際に接触しているのは、北朝鮮民衆のどの階層なのか、ということが主たる疑問となる。

AAHのスタッフの観察によると、公的な配給機構、農場、病院から、AAHが活動した保育園や幼稚園にまで至るこれら全ての構造が、人道組織と最も恵まれぬ人々との間にはられた透明な仕切りとして機能している。北朝鮮において主たる弱者の基準の一つが、まさにこれら公的な構造から排除された大部分の民衆なのである。

人道組織の支援がこのような国家構造に限られているならば、そこで知ることが出来るのは、この国の真の栄養失調についての状態を示すものではなく、当局が周到に何万もの真に困窮した朝鮮の人から支援を取り上げているのである。結果として、いかなる人道支援の提供も、体制を支持し、翼賛するものとして選ばれた人々を助けるだけであり、それは決して最も恵まれない人々ではないのである。

1-1 恵まれない人々へ配給しない体制を通じた支援

咸鏡北道における保育園や幼稚園に対する支援事業を通じて、AAHはこのような仕組みを通じた活動を背一杯試みた。そして、栄養失調に苦しむ子供たちと接触することは不可能であることがわかった。なぜならば、これらの施設に通っていないからである。しかし、完璧な理論に基づく介入とは、彼らに支援をもたらす手段を見つけ出し、彼らに密接に働きかけることである。AAHは道都である清津に5人の専門家を置き、継続的にそのような存在を維持できる唯一の組織、つまり、現場で強力な存在であったにもかかわらず

である。

AAHからの栄養学者が、唯一例外的に、五歳以下の子供がいる保育園における栄養失調の事例を見てきた。1998年と1999年、監視の中、咸鏡北道の保育園でAAHにより実施された成長調査から、これらの施設に通園している児童の1%以下が栄養失調にあることがわかった。しかし、1998年10月、世界食糧計画、ユニセフ、ヨーロッパ連合による栄養調査は、北朝鮮の子供の約16%が栄養失調になっていることを示していた。

このような相違をどう説明したらいいのか？



AAHのスタッフは、これらの施設に通ってくる子供は大部分が健康な子供であるという事実にはたちまち直面しなければならなかった。人道ボランティアが町や村に行った時に、頻りに目撃したやせ細って飢えた子供たちを追跡する術はなかった。いくつかの保育園の責任者は、栄養失調の子供が彼らの保育園にいるが、病気が重いか、あるいは衰弱しているために登園していないと説明したが、これにより暗に確認できたのである。AAHは、不幸にもこのような子供たちにはいかなる意図による支援も到達しないのではないかとこの強い疑問をもった。

北朝鮮政府が人道支援を利用するために統制するのに用いているような国家機構を通じては、決して最も恵まれない人々に接することは出来ないのである。

しかしながら、栄養失調の存在は否定し難い

その証拠がボロをまとい、青白い顔色で、捨てられたストリート・チルドレンである。彼らをAAHの人道ボランティアは毎日見かけた。当局は、このような子供の存在を否定し消し去っている。接触することを禁じられた子供たちがいるのである。咸鏡北道の全ての援助は当局により許可されなければならず、この当局の枠外ではいかなる支援も許されないのである。

AAHの人道ボランティアは、最もひどい状態にある栄養失調も見ることとなった。それは清津の「孤児院」の中でのことである。

1-2 援助は飢餓に瀕した子供に届かない
：「孤児院」の場合

AAHのスタッフは、1998年と1999年の間に三回、咸鏡北道の道都に政府の孤児院（訳者註；社会主義国家なのにわざわざ official と表記して

いる）として設けられた二つの施設に訪れることが出来た。

1999年7月の訪問では、総計380名（2つの施設で、1つは0歳から4歳までの子供を、もう一つは、五歳から六歳までを引き取っている）の子供のうち、栄養失調になっている子供の割合は、20%以上に達し、その大部分がかなり深刻な栄養失調の症状を示していた。

人道ボランティアが見た子供たちは、精神的にショックを受けており、空ろな目をして集められ、消耗症（訳者註：marasmus 幼児に多い症状）にかかっていた。保育園や幼稚園ではみられなかった栄養失調がここでは実に顕著に見られた。

最もひどいのが一歳以下の子供たちであった。その大多数が鼻から胃へカテーテルで栄養を速やかに与え、そして消化回復させることが必要であり、さもなければ数日で死んでしまうであろう。全ての子供が放置されており、汚れた布を被り、そして化膿性皮膚炎や疥癬といった感染症による皮膚病になっていた。

なぜ、これらの子供は治療されないのだろうか？ 彼らは何者なのだろうか？ これらの子供の出身についての北朝鮮の職員の説明は、控えめに言っても、混乱したものであった。すなわち、（両親が死んだので）孤児となった子、片親の家庭から来た子、「窮状に陥った家庭」から来た、両親が「親としてのつとめを正しく果たせなくなった」ところの子、「治療が済んだら施設を出て」、そして「家族のところへ帰る」予定の子。

実際、これらの「孤児たち」は、孤児院にだけ居るのではない。彼らと同じ境遇のものは社会にはもっといるのだが、そこでは望まれない子供が単に社会から隠蔽され、ほとんど恩恵に預かることがない。

実際、人道活動家の観察によれば、これらの子供は全くかまわれておらず、そうである以上、これらの施設は現時点では、必然的に死に場所なのである。栄養失調に対する何の対処も施されず、北朝鮮の職員自身から聞いたところによれば栄養失調の子供たちを医療システムに委ねることさえ全くないのである。実際、清津の小児科病院を訪問することが出来たAAHのスタッフは、そこで栄養失調の子供を全く見なかったし、栄養失調の治療の頼みの綱である特別な栄養失調回復の器具ひとつ持っていないのであったのである。

これら重大な欠陥から、かつて、栄養失調を改善するために清津の孤児院に栄養失調回復を専門とする治療組織を作ることを提案した。1999年10月、北朝鮮当局はこの支援の提案を、何の説明もなく拒絶した。北朝鮮当局によると、栄養失調の子供は、「道当局によって治療されており」、「道は外部からの支援なしでも、独力で子供の状態を改善できるだろう」としていた。AAHはもし子供たちの治療が出来たのであれば、これらの子供たちの命を救うことが出来たのである。よって、北朝鮮当局の拒絶は犯罪的である。

また、AAHの人道ボランティアは、かなりの家庭においてひどい栄養失調にある子供たちが

ただ家に閉じこもっているだけで、助けもなく緩慢な死への宣告にあるのではないかと強い疑念を持つ。

1-3 最飢餓層との接触、その最後の試みの失敗

最も弱い立場にある人々が支援の通路である国家機構と関われないとの観察から、AAHは清津の市街で仮設食堂を通じ暖かい食事を直接配給するシステムの整備を提案した。北朝鮮当局は、この事業を実施するためにAAHが提案した方法の許可をしなかった。わけても、AAHが主張した基本的なモニタリング・システムは、この計画が対象とした恵まれない人々のために本当になっているのか、どうかを確認するために必要なものであった。

2 人道介入のモニターを認めない不透明性

AAHは咸鏡北道で二年間活動をしてきたにもかかわらず、この地方における子供の栄養失調の割合を調査することができないことがわかった。AAHのボランティアは北朝鮮政府が見せたいと思ったところを訪問することが出来たに過ぎない。

AAHのボランティアは、住民の状態を判断し、活動目標を決めることを可能とする客観的なデータが完全に欠如することとなってしまった。入手可能な唯一のデータは、北朝鮮政府により提供されるものであり、それは（訳者註；信頼性を）検証できないものであり、質が一定しないことで知られている。例えば、AAHの栄養補給計画に関する咸鏡北道の住民リストが変更され、その人口は1998年から1999年の間に何の説明もなく減らされたのである。北朝鮮当局が提出した1998年のリストによると、20万5千人の子供が、保育園と幼稚園に通っていた。1999年、この前年と同じ数の地区の子供の数が15万7千人に減らされていた。つまり、1年の間で約4万8千人の違いがあるのである。1998年に提出された受給者の数は大幅に過大なものであったようだ。これはAAHが実在しない5万人に配給を行ったことを意味するのだろうか？ この援助はあるいは誰のもとへ行ったのであろうか？

多くの場合、データは疑いもなく間違っただけである。1998年並びに1999年に、咸鏡北道にある保育施設230ヶ所以上に対し訪問を行った間に、AAHは、これらの施設に実際に通っている子供の数と、当局により知らされたり、報告されたりしていた子供の数を比較することが出来た。我々の団体が行った食糧援助の配給量は、後者に基づいていた。保育施設の責任者が施設に実際に通っている子供数を意図的に過大に見積もっており、実際に登園している子供を調べると彼らが言う数の約半数でしかない、ということが明らかとなった。この矛盾についてなんら明確な説明も行われなかった。回答された「理由」は次のようなものである。「病気で休んでいる子」、「今日は休日のため両親のところにいる」、「親の仕事の都合で転園した子供がいる」（咸鏡北道の殆ど全ての工場が休んでいる時にである）

時にはさらに心配な説明が行われた。「子供たちはひどい栄養失調で、大変弱っているので登園することができない」

咸鏡北道の保育施設の数も、大幅に多く見積もられていた。AAHは支援する託児所や幼稚園の名前一覧を決して与えられたことがない。1日に4個所の託児所をまわりたいと求めた栄養学者に、1999年に許可されたのは1日3箇所の訪問であった。北朝鮮の職員が案内した施設で、前年に訪れたことがない施設はただの一つもなかった。ここから、AAHの栄養学者は咸鏡北道のほとんどの託児所を（あるいは、少なくとも見せる「ことができる」施設の全部を）訪問したに違いないと推定した。彼等が訪問した託児所は二百をわずかに上回るものであったが、当局が示した咸鏡北道の託児所の数は千以上であった。

このような矛盾から、この千箇所のうち訪問できなかった託児所に対する援助の最終的な行き先について疑問が生じた。疑いもなく援助の大部分が他に転用され、援助が与えられているという施設の大部分は全く存在しないのである。この当局により維持された不透明な制度は、北朝鮮当局にとってあらゆる利益を維持し続ける保証なのである。北朝鮮当局は、人道の実態が外部に知られるような可能性を減らすことに絶えず努めている。同じように、いかにして諸団体の活動を統制しているかが露見しないようにつとめているのである。

3 統制下の人道活動家

救援団体のボランティアは首都ピョンヤンの外を一人で旅行することが許可されなかった。彼らは、いつでも当局がその意のままに指定した通訳を同伴しており、このために北朝鮮の民衆と直接、そして自由に交流することは不可能であった。

ボランティアの旅行は全て事前に計画されなければならなかった。外国人は、AAHが援助している施設に訪問を希望するばあい、その詳細な旅行計画を一週間前に提出することが求められた。

これは明らかに当局が訪問先の「下準備をする」ことができるようにするためである。AAHのボランティアが託児所や幼稚園を訪問すると食糧は十分に貯蔵されているのであるが、台所は、しばしば、全く使われた形跡がないのである。幾人かの施設の責任者は、AAHの栄養学者の質問に対し事前に作成されたメモを読みながら回答した。彼らは非常に統制された方法で話し、しばしば、彼らの回答は通訳により「訂正」されていたようである。

全ての計画、そしてAAHのボランティアが新たな施設に行きたいという要請は許可を得なければならなかった。これは常にできる限りAAHの旅行を制限するか、あるいは中止しようとする当局者と、必ず論争を起こすこととなった。施設を不意に訪ねることは全く不可能であった。

AAHは食糧を与える実際の配給の職務に就くことがなかった。当局の配給システムがこれを統括していた。為し得た唯一の監督とは、施設を

訪問することであった。しかしながら、AAHのボランティアは配給記録と貯蔵記録という書式による管理システムを苦勞して作り上げることを試みた。驚くには値しないのかもしれないが、そこには全く欠損がなく、収支が合うのである。施設の責任者は「完璧な」収支報告書を提出した。

実際、北朝鮮当局は食糧援助の配給を完全に統制しており、外国人により実施される検証は、全く意味がないのである。北朝鮮当局により援助団体とみなされるのは、単なる食糧提供者であり、それら提供物の査察を要望するようなほんのわずかな権利でも持っていれば、それは援助団体とみなされないのである。NGOの力と参加権は、皮肉にも彼らが供給できる立場にある物品の量（種子、肥料、食糧、等々）に応じているのである。施設の職員は、しばしば、行方がわからなくなる物資、特に食糧、があることを強調するが、つまり、もっと多くの食糧の援助を、そして、地方の食糧生産工場の修復の要請を求めているのである。小規模な、質的な援助事業は、特に強い統制と妨害の下に置かれ、ボランティアはそれを克服するためにおおきな労力を使い果たすこととなる。量が最優先なのである…。

4 北朝鮮では「人道的」支援が弱いというより、むしろ「政治的」支援が不足

国連の諸機関、特に世界食糧計画やユニセフは、その予算の大部分がアメリカ合衆国により負担されており、そのような機関が北朝鮮への莫大な支援を割り当てているのである。この援助は本質的に政治の論理、すなわち北朝鮮の崩壊の回避に従ったものである。このような援助は、核の脅威や弾道ミサイルの可能性を振りかざすことをためらわぬ北朝鮮当局が巧みに行った政治取引に対する西側諸国の対応なのである。北朝鮮の破壊的な戦略に直面し、まず第一にアメリカによる穏健な対応が国連諸機関を通じて実施されているのである。

国連の諸機関や人道支援が全体としてこのような手段とされるため、北朝鮮におけるNGOの立場は著しく弱くなり、それは人道的な観点においては危険なのである。それは結局、幾万もの朝鮮人を「現実政治」という祭壇上の犠牲とすることになる。かくも豊富に与えられた食糧援助から完全に排除されているからである。

人道の原則だけが朝鮮の体制から周到に隔離され、飢え打ちひしがれた人々への支援を可能とするのである。しかし、主要な国際組織が100万トンもの物資の供与をしながら、そしてそれ故（訳者註：つまり、援助の量にものを言わせた）の交渉力をもちながらも、その原則を行わないのであるならば、いかにして基本的な人道原則の尊重を求めることができるのだろうか？

この「人道のダンピング」は、北朝鮮当局を強化するが、しかし、援助の原則の遵守を担うことに努め、その事業を監督しようとするNGOの活動を損なうものである。たとえ、物資が送られても、その援助が目的とした受益者のもとに届くま

で注意深く監視されないのであれば、腐敗は容易に生じるのである。

勧告

結果として諸機関は北朝鮮に対する援助の配給について真に弱者であるという基準、特に飢餓に打ちひしがれた人々に最終的には援助が可能となる社会的基準に基づくことを義務づけるようつとめなければならない。食糧援助の受益者が施設となるのは不可避である。このため食糧援助の配給に際し、受益者がどのような社会的、経済的な弱者かという基準が全く考慮されていない。

中でも国際社会は、北朝鮮当局により軽んじられている基本的な人道の諸原則、すなわち、受益者と直接に接触すること、直接的な監督手段を現場に置くこと、活動の影響を評価する自由が、北朝鮮で守られるように、圧力をかけるべきである。

最後に特に述べておくが、国際社会並びに援助提供国は、現場の人道活動家に最も恵まれぬ人々のためにだけ栄養支援の事業を実施する手立てを与えるために、北朝鮮により厳しい政治姿勢を強化すべきである。

結論

北朝鮮では、人道支援は何の監督もないまま行われており、それは最も恵まれない人々に届くことはない。

どんな発展を期待できるだろうか？ それは疑わしい。国際社会との関わりで言えば、北朝鮮に対する人道支援は、実際には、最も弱い人々に支援を行うという本来の目的よりは、多分に外交と政治の論理に対する対応なのである。ある意味で、餓死が続出する最も恵まれない層というのは、「現実政治」という祭壇の生贄とされているのであり、その「現実政治」とは、平壤の体制を安定化させ、軍事的な危険性についてその能力を抑止することを意図しているのである。人道支援とは北朝鮮の体制に対する白紙の小切手であってはならないと確信する。AAHは人道支援を隠れ蓑とした政治への支援を行うことは出来ない。北朝鮮の民衆の犠牲を支持することは出来ない。

国際社会による建設的な関与の方針とは、それゆえ、事業を実施することと、最も恵まれない人々と接触を持つこととを同時に行ってゆくことである。国際社会の認識と主たる援助者に厳格な要件を課すことだけが、状況を前進させることができる。

幾年にもわたり莫大な食糧援助が送られながら、北朝鮮の人々が飢餓により死につづけることは許し難い。

(おわり)

(翻訳 川島高峰)

いづづげ

金啓子



守る会関西支部会員の金啓子さんが、所属の同人雑誌『白鴉』第六号(二〇〇〇年四月二十五日発行)連絡先 大阪市西成区岸里東二一九一十二一〇一 石井田様方「白鴉文学の会」に発表された短編小説「ことづげ」を紙面の都合でおよそ半分だけ紹介します。帰国運動によって高校生のとき北の地に単身渡った兄を日本から妹が三十四年ぶりに北朝鮮を訪問して再会する物語です。こうした分割紹介にもかかわらず掲載を快諾された作者に感謝いたします。(編集部)

序

『チャム、マボベ、チヨミリヨグナ(まああ! まるで魔法の調味料だわ)』
わたしは飛行機の椅子に沈むように座りながら、嫂あにいよの声を思い出していた。
嫂は両手を手首のところで合わせ頬を持ち上げた。眼は輝き高揚していた。

ヒエと粟と麦の混じったご飯と大根葉汁が、この、日本からのみやげのハイミーで魔法にかけられたように味が変わるといふのだ。

一週間前の九月四日、平壤空港に降り立つと、旧式のイリュージョン機が並んでいて、全日空のボーイング・ジェット機が際立って見えた。そこからバスに乗り平壤駅に着くと、鼻を塞ぐような異様な匂いに眼を白黒とさせ息を詰めた。それは、ニンニクとも違って汚れた靴下をかがされたようにで脳髓までクラクラとしたが、それらのことに、さして驚かず戸惑わずにいたのは今になって思えば、事前にそんな噂を聞いていた心がまえがあったためだろう。

それにしても、はるばる日本からの訪問で、三十四年ぶりに妹をもてなすために、兄の家族が用意して待っていた晩餐の貧しさは、わたしの心を萎えさせた。

三十四年前、わたしが十五歳の時、三つ違いの兄は同級生達と一緒に共和国へ帰国した。社会主義の祖国建設に燃え、髪を七三に分けて颯爽と新潟から船に乗りこんでいった。その時の兄は若者らしく些細なことに頓着せず、真つ直ぐに人を信じた。それをどうして責められるだろう。アメリカ

力かぶれたった兄は政治に疎く、帰国をフロンティアと言った。血が燃えたぎると言った。目の前に現れた兄は、かつてユウニイと呼んだ面影はなく、三十四年の月日の重さ、深さをその、インテリ層特有の白い顔、黄色く濁った眼、尖った肩、緩慢に動く手足が物語っていた。細い首は処刑を待つ前の鶏に似て皮膚がたるみ、密かに持ち出した酒をおおる姿は張り子の虎に似て、上下左右に揺れていた。鬱積が重いのか、すでに酒に犯されているのか、その姿はどんな演説よりも雄弁であった。

わたしの思考回路は今にもオーバーヒートしそうだ。わたしは真実がどこにあるのか、というひとつの疑義にとりつかれたようだ。ここに、ある人間の物語をしたと思う。そう、単純で明解なことだ。しかし、わたしの体はいよいよの疲れと倦怠とで押しつぶされそうだ。

今、飛行機は東海、日本から見ると日本海の上を飛んでいる。やがて真つ青な海がときれ陸地が見えてきた。わたしは、かすかな安堵とくつろぎを覚えた。機内でさざなみのようななざわめきが起きた。一様に安堵しているのだ。矛盾した思いに心を通わせるには疲れ過ぎた。わたしは、一切がくだらなくなつて眼を閉じた。すると瞼にはまたあの嫂の顔が浮かんできた。

嫂は地の人で無邪気に『日本』を取り入れる。そして、度々の父の訪問で受ける金品で平壤での生活を維持していた。父が脳溢血で突然亡くなったから一年の間に、わたしの中である疑問が沸いた。なぜ父は、兄が帰国してしばらく経つてから頻りに共和国と日本とを往來したのか? それほど潤沢に使えるほどのお金もなかったはずだ。しかし、一度ふらつと出かけると二、三カ月留守にした。突然消え突然帰ってきた。父の遺物を整理していると、訳の分らない暗号文の解説書のような物や、黒いサングラス、変装用のヒゲ、かつら、父の写真とは似ても似つかぬ写真が貼られた身分証などが出てきた。わたしは、わたしの記憶の中にある事実との関連に興味を覚え、また釈然としない疑問を解くために、父の一周忌を終えて今回在日の商人たちの『祖国訪問団』の旅に便乗したのだった。

平壤駅でバスを待つ間に民族学校の修学旅行生たちは、高麗ホテルでの話題にこと欠かなかつた。シャワーの湯が途中で切れ、赤い水が出てきてあたふたとしたことなど愉快に喋る。まったく無邪気である。

平壤には外国人向けにノレバン(カラオケボックス)も、温泉地に見られるような銭湯もあり、入湯料は大人が日本円で三百円ほどだった。嫂を誘ってみたが、もつたいないという。三百円の外貨があれば、『農民市場』で卵を百個買える。決して支給されない外貨があれば、『農民市場』で翻訳をして生計を立てている兄は、月に百四十ウオン支給される。だが、そのウオンとは別のウオンを持たなければ外貨ショップ『農民市場』での買い物かなわらないことを初めて実感したのであった。わたしが円と交換した紙幣はグリーンとピンク、えんじ色に別れていて小さくみすぼらしい。兄の持つ紙幣は茶色で千里馬の絵が入る立派なものだった。しかし、その価値たるや天と地ほどの隔たりがある。

父が交換紙幣を持って買いそろえたという炊飯器や洗濯機も、電気と水にこと欠き使えないでいた。オンドルがあるといっても電気が回らず、冬になると、部屋の中でもマイナス五度の中で震えているといった。それでもわたしたちはエリートなのです。と嫂は笑った。

ずつと付いていた案内員は、猿のように狡猾に目を動かせ、油断なくわたしたちを監視した。わたしが一万円を包み彼のポケットに忍ばせると、表情ひとつ変えずに受け取り、夕飯が済むと帰っていった。嫂は丁寧に案内員を見送ったあと、いまいまして舌打ちして、

「イーチョンノマ！（たかりめ！）」

と言った。それからの、朝までの時間は三十四年分に匹敵する。蠟燭をたてゆらゆらと揺れる明りの中でみる兄は次第に逆行する時間の中に居た。わたしたちは、平壤空港に降り立った時から、この家庭訪問までに味わったいくつもの驚きと憤懣とを吐き出していった。

「金日成競技場で九・九記念の集団体操を見たんやけどなあ、ユウニイ。」

「キムジョンイル チャングン マンスムガンハセヨ！（金正日將軍、永遠なれ）」っていう時、小学生のような子が旗を振りながら感極まるというように涙を流してた。意味判つてるのかなあ？」

兄は黙っていたが、大学院生の甥はわたしの言葉を遮るように、「それが勉強なんです。……わたしたちは判っています」と言った。

「国民学校は一年のうち、半年はマスの練習ばかりします。万一疑問を持つと……それは精神病です」

「じゃあ、あなたもそうなの？」

「いや、わたしたちは学校で勉強していました」

「いや、少し間を置いて、
「今はロシアになりましたが、崩壊前のソ連に留学したことがあります。それが、その時に自由というものがどういふものか、分かりました」と、彼は続けた。

「どういうこと？」

「甥はじつとわたしの目を見て、

「この国がおかしい、と言うことは知っています。ソ連ではジーパンも自由にはいていましたが、平壤では、女性はスカートでしか外出を許していません。全て作られたものです」と言った。

「社会を変えるのは、いつの時代にも若いあなたたちでしょう」と水を向けると、

「わたしたちは判っています」

と苦しうに吐き出した。兄はじつと腕を組み目蓋を閉じていたが、朝になるとまた、あの、今にも息の切れそうな鶏の表情になった。

平壤での生活の中に風呂に入るといふ習慣は無かった。一日の内、朝の五時から六時までの一時間と夕方五時から六時の一時間しか水が出ない

ところでは溜めおいた水は貴重なのだった。少しの湯でもって、顔や手足を洗い口をすすぐと、それが沐浴となった。

嫂からもち米の依頼があつて、わたしは一升のもち米を腰に巻き付けて行った。彼女はそれを両手でうやうやしく持ち上げ、目をつぶった。そしてプロパンガスの弱い火でゆっくりと煮ておかゆを作った。なにをするのかと聞くと、キムチを作るのだと言う。わたしが兄弟で集めて持ってきたお金を渡すと、待つてましたとばかりに、嫂は配給では当たらないニンニク、唐辛子を『農民市場』で買ってきた。アルミの洗濯桶に、とろりとしたおかゆを流し、唐辛子を混ぜると肌色の混じった唐辛子が渦になって広がり、オレンジ色になった。ヤンニョムといってキムチの素だ。塩漬けた白菜にヤンニョムをすりこみ甕にいれるのは二日後のことだといつて、彼女は顔を上げ笑った。

「ウムに入れたらもつと味がでるんだけど」

「ウム？」

「そう、土を掘って作った貯蔵庫なの。ウムの中は年中五度位なんだけど、このアパートじゃあねえ、冬はマイナス十五度まで下がるし、夏は夏で、ね！ すぐ酸っぱくなるの」

嫂はいたずらっぽく笑った後、ウムのあつた遠い日の生活をなつかしむかのように頬を緩めた。

食事の時に食べたキムチはやけに白かった。嫂は、その白いキムチだから、たまたまの塩漬けた白菜だからかわからないようなものの葉を広げご飯をつつむようにして食べていた。まるでキムチだけが惣菜であるかのように……。

キムチが栄養のすべての役目を果たすのなら、発酵するための薬味は多いほうがいいではないか！ わたしは、この不可解な、持つて行き場のない怒りに涙を流した。嫂はなにも疑っていないが、二泊三日の訪問でわたしは利那に一切を了解した。しかし兄も嫂も不平を漏らさない。

それから三日間、激しく揺れるバスに乗って方々を回ったはずなのだが、わたしには、枯れ草の山と山にはさまれた、いかにも貧しい農村で、暮色に薄く上っていく煙と、頭の上に風呂敷包みを乗せ石のように固い表情でただひたすらに歩く老婆、体をくの字に曲げて柴を運ぶ女、赤茶けた顔の刃のような眼をした瘦せた男、トウモロコシ畑などが乾いた風景として心の中に澱となって残った。赤土と岩だらけの山にトウモロコシの葉だけが緑の色どっている。みすばらしい葎屋根と平壤の街並みとの隔絶。言葉

を失ったかのように表情のない人々と、威張り散らす案内員の中にいて、平壤では見なかつた犬が、スローモーションビデオを見るように、悠然と動き首を上げてバスを見たその姿が、唯一生きた実感を与えた。

およそ、わたしの感傷を笑うかのようには瞬く間に過ぎた。なんの手立ても思いつかず、父の足跡も探せない間に帰路についている。そして、わたしはそれを喜んでさえいるのだ。しかし、わたしの心は、真つ赤な唐辛子で目つぶしにあつたようになっていて、お金を渡した時の嫂の嬉しそうな表情が切なくわたしの頬に焼き付いて離れない。

飛行機は大きく旋回し名古屋空港に着陸した。曇天の空港に降り立ったわたしは、がやがやと賑やかな商人たちに押されるように到着ゲートを歩いていた。わたしは、チケットを持つ自分の手が汗ばんでいるのにその時初めて気がついた。

このあと作品は、一から四まで 四章がつづき、主人公の「わたし」こと金明子の少女時代です。大阪の貧しい朝鮮人部落に育ち、労働災害で右腕を失って働けなくなった父、内職で必死に家計を支える母、アメリカカが右腕の兄の勇一、貧しさゆえの両親のいさかい、日本人から受ける差別などが描かれています。

そこへ父を訪ねてきた男の「祖国は地上の楽園で、教育はタダ、衣食住に不自由はない」という夢のような話に引かれて明子は新しくできた朝鮮人小学校の四年に編入します。一年ほどしたら文宣隊という同胞の意識を高める文化工作隊の一員として歌や詩の朗読などを広めて回るまでに成長してきます。

(編集部)

五

冬の寒い朝だった。朝礼台の横のポールにゆつくりと旗が上がっていく。直立不動のソンセンニムとわたしたち。そして『エグツカ(愛国歌)』が流れている。アーチムンピンナライーガンサン(日の出に輝くこの山河)わたしは、エグツカを聞いてもピンとこなかった。民順の家族は裕福というには遠いが、全財産をなげうって学校に送迎バス一台を寄付した。今日はその贈呈式だ。鼻水が流れた。校長は応援団長のような声を張り上げている。しもやけの手がかゆくなってきたが、がまんをした。パルチザンは雪の中で凍傷にかかった足を自らノコギリで切ったと習ったばかりだ。なんのこれしき、と思っても段々とかゆくなってきた。意識を反らそうと、ツバを額につけてみたり指を開いたり、閉じたりしたら今度はあかぎれが開き、血がにじんできた。寝る前に『桃の花』をつけて寝なかつたせいだ。毎日炊事していると、直りかけたしもやけや、あかぎれがわたしの苦しめる。いいなあー民順は。お母さんが炊事、洗濯ぜんぶをしてくれるから……と考えていると、演説が終わった。

「シヨー! チャリヨー! (休め! 気をつけ!)」

班長の声が響いた。

「余允義氏より、帰国に際しての記念品としてバス一台を我が学校に寄せられました。ここに、余允義氏の愛国精神に敬意を表して金日成チャングンの歌を歌います」

チャーソンベッサン チュルギチュルギ(長白山脈の山波が)

ピオーリンチャンウツ(血塗られて)
アーンノツカン クービクビー(アーンノツカンの水脈も)
ピオーリンチャンウツ(血塗られて)

そうだ、キムイルソンチャングンのおかげで国が取り戻せたんだ。でも、この、かゆみをなんとかしてほしいと、わたしは思った。

秋に、民順の帰国が決まった時、父にそのことを話した。

「なあ……アボジ、民順とこキグツ(帰国)編集部するねんで……うちとこも帰ったらユウニイも学校にいけるやん!」

「そうやが……。わしは、故郷を捨てて来た。ここを故郷と思つて暮らしていかんや……。酒屋のつけや、八百屋のつけ、病院のつけを踏み倒しては、どこへ行つても幸せにはなれんだろう。林さん(余氏の通名)はりっぱな人だ。ここにいっても暮らせるが、国へ帰つて祖国建設に参加するんだから」

と言つていたことを思い出した。

クラスで民順の帰国の記念に六甲山へハイキングに出かけたことが昨日の事の様だ。ハンチング帽を被つたソンセンニムとわたしたちは、合唱しながら歩いた。ソンセンニムはハーモニカでカチューシャを吹いていた。険しい場所に遭うとパルチザンの『苦難の行進』といつてはしゃいだ。

「明子、ナー(わたし)がキグツしたら絶対手紙書くから返事ちょうだいな」

「うん!」

弱音を吐かない民順にしては珍しいことだった。皆と別れるのが寂しくなっているのだろうか? と、わたしが民順の顔をのそくと、

「明子、『北上夜曲』歌つて」

と言つた。わたしの鼻にかかった声とその曲によく合うらしく、わたしはよく歌つていた。

「うん、ええよ、『にーおいーやさしいーしらゆーりのーぬれてーいるーよなーあのーひとみー』」

民順の顔を見ると泣いている。わたしは、はつとして続きを歌つた。

「おーもいーだすーのはーおーもいーだすーのはーきたがみがわらのーせせえらぎよー! はい! 終り!」

わたしはわざと明るい声で言った。

「ありがと、ナーこの歌を歌つて明子のこと思い出すわな」

「うん、ナーもそうする!」

わたしは、民順の気弱さに驚いていた。いつも民順はキリッとしてわたしたちのリーダーだった。わたしたちに厳しい自分にも厳しかった。わたしたちは、新校舎に移つて朝からの登校になつても、時間を見つけては集まって勉強した。わたしは、よく民順の家に行きテスト作りを手伝つた。ワラ半紙を小さく切つて、手書きでテストを作つていく。民順はそのために予習をせねばならず、わたしの倍の時間を勉強に費やしていた。教える

ことに民順の才能は発揮された。テストをただ作るだけではなく、単語の関連性について工夫をこらした。

「キムチを漬けるのは、タングダ。塩に漬けるのは？ チョリダやで、ペチュルウル ソグメチヨリゴ キムチルウル タングダ（白菜を塩漬けてキムチを漬ける）この違いが分かる？」

と、おどけた。そして、真剣に聞かない友には容赦なく罰を与えた。それは、鼻くそを食べることだったり、白墨を投げることもあったりした。小さな黒板に向かって書いてある時にも後ろに眼があるようだった。白墨は見事に頬に当たる。光子はいつも緊張が足りずに話したり、間違ったりするので、わたしは、ひやひやしていた。

「クラスの前には、『ひとり皆のために、皆はひとりのために』というスローガンが掲げられていた。ひとりだけが優秀では認められないのだった。また、校舎の入り口に『学習は、学生の最初の革命任務です』という額が掲げられていた。それは、キムイルソンチャングンの教えだった。

民順と過ごした二年間の思い出が次々と頭の中に浮かび、わたしも切なくなってきたが、わたしたちは、急勾配の道を歌いながら降りていった。ソンセンニムは六甲道の駅前で写真をとってくれ、甘党の店でぜんざいをおごってくれた。

「ソンセンニムな、結婚したばかりで、お金あんまりないのにだいたいよぶかな？」

いつも大人びたことを言う順子が言った。わたしは餅が喉につまりそうになった。

「だいじようぶやろ」

民順は、こんな時腹をたてたように話す。

兄は、二年生の時に成績が少し落ちたが、三年生になって挽回して学年で五番の席次を取っていた。兄の担任は、頻繁にわたしの家に来た。

「勇一君をなんとか高校へ行かせてあげてほしいです」

父は腕を組み、母は思案げにうなだれていた。

「今、外国人に奨学金制度がなくて非常に残念です。どうでしょう、お父さん、民族学校に問いあわせてみられては？」

「奨学金のことですか？」

「はい、共和国は教育費が無料と聞いています。優秀な生徒には援助は惜しまないのではありませんか？」

「それは、そうですが、わたしたちは帰国する気がありません。日本にいて暮らす限りはこちらの教育を受けさせたいとは思っているのですが……」

「……………」

兄の担任はそれでもあきらめずに奔走し、朝鮮高級学校に兄は奨学生として入った。

「俺、高校から民族学校に行くことにしたから、アキー教えてくれよ。父ちゃんに、中学校出て働いたら家の助けになると思うけど、行かせてっ

ていうたら、『わしが働けたらおまえたちにこんな苦労もさせずに済むのに』って泣いてた。俺、がんばるぞ！」

兄は、高校に入ってから、それまでプレスリー一辺倒だったことが嘘のように、マルクス・レーニンを口にするようになった。夢遊病者のように『革命、革命』とうなつた。

「アキー、世の中を変えんことには俺らの幸せはないぞ」

「世の中、変えるって？」

「労働者が幸せに暮らすことのできる世の中を作っていかなきゃあかんって思わんか？ アボジみたいに怪我をして働かれへんようになっても国の保証で暮らせるようにな！」

「うちらが頑張ったらええやんか」

「あほやな、おまえは……。ここは外国やど。ちゃんとした国ができてんど。俺、朝鮮人いうことでどつか無視されてたことを今、思いだすとむしように腹が立つんや。成績が良かったからいじめはなかったけどな、俺らみたいな若い青年が共和国には必要なんや」

「でもアボジは、ここが故郷やっと思いつて言うてたで」

「こんな穴蔵の生活のどがええねん！」

「そう言うても……うち、転校してから前の学校に手紙出したけど、皆励ましてくれたで。こっちの学校でも民順がキグツしてしもうたから寂しいわ。いつまでうちらは別れてばかりしてバラバラになっていくんやろうって思うねん」

「あほやなあ……おまえは、輝かしい祖国が出来てんど。俺が先に行つて祖国建設にがんばるから、後で来い。みんな幸せに暮らそう」

「うん……」

覚めた感覚でいたわたしに比べて、兄は、それまでの鬱憤を晴らすかのようのめり込んでいった。霞みを食べてでもいけるかのようだった。キムイルソンチャングンから直接に手紙をもらった、と言つて頬を染めた。そして、選ばれた人といつて祖国建設へと両親の反対を押し切つて行った。

六

懐かしい妹、明子へ

明子、本当に懐かしい妹よ、達者でよかった。お互いに三十四年ぶりの再会も会ってみると、ただ『元氣だったか？』と手を握りあうだけだったね。日本に居る家族のことはどれだけ夢にみたことか。アボニムが度々訪ねてくれるようになって、おまえや増えた家族の写真をみていたが、わたしの臉には、十五歳の明子のままだった。おまえが短期訪問でわたしの家にいる間『わたしは民族学校に入ったためにユニニーが苦労している』と泣いていた姿が今も臉に残っている。心配しなくてもいい。こんな暮らしても笑うこともあるのだ。わたしが選んだ人生だ。おまえのせいではな

い。
おまえも知っているだろう、おまえとソナン「城南朝鮮初級学校」で学んだ李同志が金日成総合大学の教授になっているのを。その李同志が今回中国経由で日本へ行くことになったのを聞いて、わたしはこの手紙をこづける。

李同志は口数は少ないが信頼している。彼は帰国者同士結婚したが、アジユモニ（奥さん）の父上が仙台でパチンコで成功し、毎年組織を通じてかなりの寄付が寄せられているから、手荷物検査はすり抜けられるとおもうのだ。

わたしはチョンジン（清津港）についていた時の驚きをまざまざと思い出す。粉塵が霧のように激むことに加えて、人々の眼の鋭さ、覇気のなさは、それまでに聞いていた情報とは正反対のものだった。なぜこんな不毛の地にやってくるか、気が狂うほどに苦しんだ。

大阪の朝鮮部落で住んだころ、わたしがアメリカかぶれだったことはよく知っているだろう。部落の中のあの、その日暮らしの人たちを見て、わたしはわたしの将来について皆と同じ道を行くかと思うといたたまれなかったのだ。ラジオを通じて流れるプレスリー、テレビで見たアメリカの生活、そのどれもがわたしを離さなかった。そして、朝高（朝鮮高級学校）で学んだマルクス・レーニン主義。わたしの中で意識はひっくり返った。

わたしも、共和国で祖国建設の一員となれると誇らしく思ったものだ。選ばれた闘士ということで血がたぎるようだった。

わたしは、ひとり帰国すると言った時の、あのオモニムの驚愕した眼を忘れられない。いつも、オモニムは背をかかめメリヤスの目を拾っている、夜、俺たちが便所に行こうと眼が覚めた時にもまだ仕事をしていたらたね。小さくラジオが鳴っていて、眼をシヨボシヨボとしたオモニムの姿がわたしの臉に焼き付いている。わたしは本当に親不幸をした。今、オモニムもオモニムも亡くなられて、わたしには生きる力が萎えそう。わたしは、帰国してから、すぐにだまされた！という悔しさで何回も自殺を考えたがいつもオモニムのあの姿に思い止まったのだ。怪我をして働けないアボニムの代わりにオモニムは必死にわたしたちを育ててくれたね。そしてアボニムはそれこそ、凄まじく夫婦げんかをしたが、その後、いつもわたしたちに、すまなそうにして夢のある話をしてくれただろう。わたしは、その子供だ、と思つてね。

同じく帰国した張トナムは、酒を呑んで暴れ狂い、山へ送られてすぐに亡くなった。黄トナムは自殺した。山というのは、強制収容所で、同じ人間が人間をこのように扱えるのが信じられない所だ。ネズミを食べ、木の根を掘り、なんのために生きるのか考えることも出来ないのだ。明子、反抗は犯罪だろうか？ こんな現実の中で人は言葉も失っていくのだ。

わたしは、日本にいる頃に朝鮮人ということで差別を受けてきたが、この共和国では、もつとひどい差別がある。ポルレサラム（本来の人といつて、現地で生れ育った人）は、わたしのような帰国者を、キーポと呼んで

日帝時代に国を捨てた人間の子孫と見ている。あの、同じ民族が血で血を洗う戦争で金儲けをした、として許せない感情をもつようだ。金儲けだった！？

手紙で伝えていた通り、わたしは、がむしやりに勉強し、金日成総合大学に入ることができた。今思うと、キーポであるわたしがなぜ金日成総合大学に入れたのか想像することができる。しかし、当時は、うかつにも自分の力だと思つてた。そのころからアボニムが頻りに日本とこちらを往復するようになつたのだ。これは、アボニムと直接話したことはない。しかし、気がつくべきであった。アボニムはいつも突然に現れたが、その時は髭がぼうぼうで、眼の下にはクマができていた。どうしたのです？ と聞いてもただ笑うだけだったが、ふっと、北海道からイカ釣り船に揺られた、と言うこともあった。いつもわたしの顔をじっと見るだけで、すぐどこかへ行かれた。わたしは分かっていたが聞くのは怖かった。わたしのために命を張った仕事についてくださったのだ。卒業してから合弁会社で翻訳の仕事をするようになって、毎月支給される給料とよべるものが最近でやつと百四十ウオンだ。アボニムが訪問してくださるようになって、わずかだが、外貨で交換紙幣が使えるようになってからの生活は見違えるようになった。まだ、短期訪問ができなかった頃からのことだ。

わたしは、カンネイパツ（とうもろこし御飯）がづらいというのではない。日本に居たころもそれに近い貧しさだったから。おまえが交換紙幣で買ってくれた中国米は確かに美味だ。わたしが悲しいのはそんなことではない。アボニムがいつも語ってくださつたように、人は希望を食べて生きるものだろうか？ この国では、その希望や夢が画一でそれ以外は抹殺されるのだ。わたしは、もうそんなに長くはない。わたしは、このことを言わずには死ねないのだ。

そうだ、吉見先生といつたか、国道を越えてすぐのところにあつた医院の先生は。もう亡くなられていらつしやらないだろうが、わたしたち家族は本当にお世話になつたね。お金のないのを分かっても、黙って診てくださった。あの頃は朝鮮部落の人間とみると露骨に嫌な顔をして診てくれない先生ばかりだったが、弟の勇三が三歳の時だったか、ひきつけを起こして泡をふいてたとき吉見先生は、寒い冬だったが駆け付けてくださった。わたしは、後で薬を貰いにいった時、奥さんと先生のやりとりを聞いてしまったんだ。

「薬の支払いもバカにならないのに、どうなさるおつもりですか！」と、奥さんの声が聞こえたのでわたしがひるんで立っていたら、先生が気をつかれてわたしの手を引っ張って部落まで一緒に来てくださったんだ。そして、

「空を見てごらん、今日はオリオン座がとてきれいだ。空が晴れているからね。あの、一等輝いているのがベテルギウスだ。わたしたちが生まれる前からも、死んでしまつてからもこうして宇宙は輝いているのだよ。もうすぐ流れ星が通るから、願いをかけてごらん。きつといつかはその願

いが叶う時が来る。勇一君、といったかな。わたしの言うことを理解できるだろうか？ 人の一生は長いんだ。いつまでもどん底じゃないよ。底まで落ちたら、後は浮かびあがるだけだ。そうだろうか？ だから希望をもつことだ」

と、言ってくれたことを思いだすよ。

明子……食べられない苦しさよりも、言えないことの苦しみのほうが遥かに重い。しかし、わたしはしゃべりすぎたようだ。今度はいつ会えるだろうか。達者でな。

一九九九年九月二十五日

兄 勇一より

七

十月二十五日、JR鶴橋駅で午後七時に持っています。

李 俊一

メモのような手紙が届いた。消印は東京だ。疑心暗鬼なままわたしは、JR鶴橋駅の横断歩道を渡ったところにある太いコンクリート柱の影に立っていた。パチンコ屋の扉が開く度にワツという音が飛び出し、一瞬の覚醒を呼んだ。地下の穴から、東西南北の道路から人は沸きでるように出てくる。その人々の顔をラブホテルのネオンが信号のように染めている。バス停の前で小太りの若い男の、わめく声がして振り向くと、男はズボンを足首まで下げ、中腰になってかかんだと思ったら、うんこを落とす。うんこはとぐろを巻いている。わめいているのではなく、泣いているようだ。自転車に乗った中年男はその現場に来て、うんこを見ると舌打ちして、啖を飛ばしてから、小太りの男になにやらどなっている。すると、小太りの男は、大きな声でウオーンとうなり、かがんでまた、うんこを落とす。とぐろが長くなった。停留所にいた人の群れは、男の回りに半円を作って囲んだ。女は鼻をつまんだ。

横断歩道にメロディー信号が流れて駅の方を見ると、タクシーが止まった。黒いコートを着た二人の男が降りて、駅の明るい光の中に立った。背の低い男と高い男とが向かいあって立っている。低い方の男がコートのポケットをまさぐっている。高い方の男が頭を下げ、人混みの中に消えた。男は、さて、という感じでタバコを取りだし、火をつけようとしたが、風で火が消えるのか、なんともライターをいじくっている。コートのボタンを外して、その中に火を引き入れている。黒いコートから出ている首がやけに細い。痩せた鶏のようだ。散髪の形も耳の後ろまで刈り上げてあり、今の流行ではない。李俊一だろうか？

わたしはじっと見ていて、帰ってしまおうかどうか、と迷った。

あれが李トナムだとしたら、兄と会った時のように、とてもつらい気持ちになる。帰ろう……帰ろう……。わたしに用があるというのだ。男が顔をあげたら、風がふいて額が現れた。瓜のようにとがった額に見覚えがあった。「李俊一だ！」メロディー信号が流れた。誘われるようにわたしは、横断歩道を渡った。

「李トナム？」

「?!」

どちらかともなく、手を握りあっていた。李俊一の声はかすれていた。こんな声だったろうか？ 必死に記憶を呼び戻そうとした。彼は、

「オデガンマヌエヨ」

と言った。オデガンマヌエヨ？ ああ……オレガンマニエヨ（ひさしぶりだね）……と言ったのね。平壤の言葉は東北のなまりに似ていた。そして、三十七年ぶりというのに、

「君はちっとも変わらないね」

と、流暢な日本語を話した。李俊一……三十七年前の李トナム。今、目の前にいる顔面のない幽霊のような影を引きずっている李俊一。過去から突然わたしの前に現れた。わたしの記憶の彼方にいた李俊一が、その間の歴史を持って立っているというのか？

彼の帰国の際に流した涙はこんなにも長い歳月を予感したとでもいうのか！

わたしがとまどっていると、

「鶴一で食事でも」

と言った。わたしはハツとした。鶴橋の焼き肉屋の名前を自信ありげに言った。国交のない筈の共和国と日本との間で彼は三十七年ぶりに日本の地を踏んだのではなかったか？ この一瞬の疑惑をけどられまいとわたしは、

「この中に入ると、いくらでも店はあるけど」

と言った。並んで歩いて彼を見た。顎が尖っている。わたしを見て、幽霊が笑った。すると、小学生だったころの笑顔が蘇った。歯並びに見覚えがあった。堅そうな前歯の両方に凹凸に乱杭歯がある。はにかんだように笑っている。わたしと、彼との間に流れた時間の重さ、深さにわたしの目蓋は潤み、店の看板が歪んで見えた。影のような彼がわたしと会うために費やした労力は、わたしには計りしれない。さっき一緒にいた男は監視役だろうか。二、三時間の自由時間を金で買ってきているのだろうか。わたしは、このことにどう答えたらいいのだろう。焼き肉屋に入って彼は、個室のようになった部屋の四隅に鋭い眼を走らせた後、ふーっと深く息を吐いた。

「金同志に、これを明子に渡してほしい、とことづかかってきた」

と言って、ガムテープで厳重に封印された封書を出した。

わたしが眉を寄せ、じっとしていると、
「ウリン、チャールサルゴイツツ（わたしたちは、裕福に暮らしている）」

安心して……」

唐突に李君は言った。わたしの顔をじつと見ている。彼の眼は沼の底から空中に燃え出る青い鬼火のようにもの憂い光を放った。その眼は、わたしに読めと言っている。わたしは、胸を押さえた。心臓の音が彼に聞こえないか、と思うほど高鳴った。背筋が冷たくなった。

はっと、わたしは思いだした。十八歳の頃に一度だけ李君から手紙をもらったことがあった。手紙には、李君のお母さんが婦人病で悩み苦しんでいる、日本のこれこれという薬を送ってほしい、という内容だった。手紙には切羽詰まった様子が書かれてあり、わたしにして、李君のお母さんの痛みが想像できた。躊躇しながらも薬局に行ったが、とても恥ずかしくなつて送ることができなかった。薬局の店主のうさん臭げな眼に、わたしの心は羞恥心で破裂しそうになったのだった。しかし、薬を送れなかったことが、年を追って後悔された。

「李トナム、あの時はごめんね。薬局に行ったんやけど、なんでか送れなかつてん」

わたしは、やつと言った。

「ああ……そんなこともあったなあ……」

李俊一の眼から青い火は消え、彼は遠い眼をして、

「なに……ケンチャナヨ（いいよ）……。あつ、い、いや……イルオツソヨ（なんでもない）、イルオツソヨ……」

と言った。わたしは、この時の驚きを言い現すことができない。わたしは、彼の生活を想像することができた。韓国では当たり前のように使うが、共和国では決して使わないという、ケンチャナヨ……。彼は、しきりに酒を呑んでいる。顔が青くなつてきても酔う様子でなかった。わたしは、これ以上彼を追い詰めてはならない、と思った。わたしに何が分かるというのだらう。父が秘密を持ったまま逝ってしまった今、探るすべもない。さっきの鬼火のような不気味な眼は、父も時折見せた眼だ。暗い深淵に真っ逆さまに墜ちていく恐怖の中に彼は居る。

思い出話を継いだ。無邪気に笑った。影が揺れた。

わたしは、遠い昔に、若狭の浜で父の指図通りにテーブルを流し踊っていたことを思いだしていた。妹とわたしは、なんの疑いも持たず父の帰りを待った。父は見慣れない人と戻ってきて、また、どこかへ消えた。

「ツンタッタ……ツンタッタ……」

ザーザーと雑音の入るテープの音が聞こえてきた。

兄の手紙を持ってわたしを訪ねてきた李俊一。ひとりの初老の男。忘却が蘇り苦しげに息をする過去からの使者。無意識に全てが現れたしたが、全てがわたしの幻想のように思えてきて、あの、潮騒の波の音が蘇った。

わたしは、段々と遠景の彼方に縮む李俊一の顔に、わたしのぜいたくな涙を重ね、嗚咽の中で兄の命のことづけを焼いた。

「ことづけ」に寄せて

萩原 遼

「帰国」というものが在日の人々にとってどれほど大きな悲劇であったかをこの短編はみごとに描いています。

すばらしい祖国建設を夢みて北の地に渡った作中の主人公金明子の兄勇一は着いたとたんに「だまされた」と知って自殺を考える。帰国したほかの友人も収容所に送られて死んだり、自殺したりする。父までが息子を救うためのちに北の工員になつて秘密の工作に従事し、同級生の李俊一は韓国への潜入をくり返す工員にさせられる。

すべて「帰国者」という弱身を握られて北当局に強要された非人間的な任務です。こうした在日コリアンの悲劇を初めて正面からとりあげ文学作品に結晶させたこの作品は大きな意義をもっています。在日の手によつて書かれるべくして書かれた作品であり、作者はいくつかの試行のすえに大きな鉦脈を掘りあてたといえます。こんごこの鉦脈をどどん掘り進めて豊かな収穫物を私たちの前に見せてくれる大いなる期待を抱かせてくれる作品です。

作者は十一月初めに知る『白鴉』第七号に「墓掘り人」という短編の連作を発表していると語っています。

作者の金啓子さんは一九五〇年生まれ。一九九八年より大阪文学学校の本科と専科で二年間学んだ人。『白鴉』同人に芥川賞を受賞した在日の玄月さんらがいます。作者の本業は大坂・鶴橋の居酒屋のママさんです。

ちなみにこの作品は文芸誌でも反響を呼んで『文学界』の八月号は「衝撃の記録」と評し、『新日本文学』十一月号の同人雑誌評では、作品のあらすじを紹介しながら「人間として考えさせられる問題を抱えていることは確かだ。それはおそらく文学が明かに指し示す役割を担っている。なぜならこれほど具体的に、リアルなものに説明する手段はほかにないであろうから」と、高く評価しています。

作者のこれからの活躍と帰国者の問題を広く日本と世界に訴える執筆活動が大いに期待されます。

〈了〉

編集後記

- ◆ 会員のみなさん、『かるめぎ』読者のみなさん。秋たけなわのよき季節となりました。お元気のことと思います。今号は盛りだくさんの原稿が集まり、臨時増ページ号としました。通常の2倍の分量です。このため、通常の10月1日号と12月1日号を、この35号で11月1日号とし、事実上の合併号とさせていただきます。あわせて、これまでは隔月の偶数月の発行でしたが、これからは奇数月の発行とさせていただきます。理由は年初の号が偶数月なら2月1日号となりますが、奇数月にすると1月1日号となり、年明けを出足早く読者のみなさんに会報をお届けできるからです。日本と朝鮮半島をめぐる情勢の進展に『かるめぎ』の役割がますます高まっていることに見あった措置であることをご理解いただけますように。
(萩原 遼)
- ◆ 上京中のキム・ヨンファさんとの話の中で、一度彼が涙ぐんだことがあった。それは彼の息子が、みせしめのために左手を切断されたという話をしたときだ。10年以上も離れていれば家族への想いはひとしおだろう。まして家族に迷惑がかからないための秘密裏の脱出だったといい、そのための息子の犠牲ということでは、悲しみも大きい。それでも将来の家族と一緒に生活の夢は持ち続けている。これは今ではまだ奇跡に近い願いだろうが、離散家族の問題がここにもある。ところで日本では帰国者から七千通あまりの手紙が日赤に寄せられ配達されないという。それは住所が分からないだけでなく、相手側が受け取りを拒否している場合もあるという。援助要請と思い、これに答えたくないからだろうかとも考えられる。しかし、金民柱さんの話では、「帰国者」にとっては日本へ手紙を出すことにはリスクもあって、日本の親戚の住所を書いた紙さえ北では秘匿すべきものであるようだ。最近では世代が代わり、その住所さえ分からなくなりつつある。そんな中、日本に手紙を出すのはよくよくの場合という。その話を民柱さんが先の運営委員会の席上披露され、「配達されない七千通の手紙」の重みに今さらながら運営委員一同ショックを受けた。日朝関係を扱う日本の新聞記事やテレビ番組の中でまだ日本の離散家族、「帰国者」やその手紙についてふれた報道は目にしたことがない。
(佐倉)
- ◆ 日々のたゆまぬ地道な活動が、いずれ大きく変革へと繋がって行くものと考えます。今月も中国・四国に支部設立を求めて遼さんとでかけてきました。何処にも自由に行ける事の素晴らしさをふっと感じました。70年代まで多くの在日は、この日本より自由に海外にでかける事ができませんでした。今では、そのような事もほとんど無くなりました。しかし、北朝鮮では、今なお自由に出国する事は叶いません。人間形成において何処をも見聞できることは、その人の素晴らしい人生を形成する上で非常に大切なものであると考えます。北の人々にも自由に世界を駆け巡る事ができる日が訪れる事を願ってやみません。
(金 国雄)
- ◆ 金啓子氏の「ことづけ」、作品の舞台となっている土地は小生の生まれ育ったところであり、しかも作者の金啓子氏と小生は、年齢から推察するかぎり同級生です。当時の雰囲気のみごとくに伝わってきます。「そのバス通りは別名、柳通りとも呼ばれた。道の両側に柳が植わっていて風になびいている。柳通りに駄菓子屋と銘湯『菊の湯』に挟まれるように、朽ちかけの診療所跡があった。診療所の門柱に墨のあとも鮮やかに『城南朝鮮初級学校』と書かれた看板が打ちつけてあった」柳通りはそのままの名で現在も存在しています。「菊の湯」は名こそ違いますが、推定される場所にはいまも銭湯があります。診療所跡というのは、心あたりがありますが、複数の教室をもつ学校の敷地としては、あまりにも狭隘ではないかと思われます。小説である以上、つくられた部分もあるかと思いますが、それにしても、作品のなかのいろいろな場面に現われている状況は小生の実感と共通しています。
(叶岡)

☆お詫びと訂正：「かるめぎ」34号、「7・15金英達さん追悼学習会 英達（ヨンダル）さんを語る」の記事中、沢田竜夫さんの所属は、「RENK 東京」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。
(編集部)

発行：北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会 年会費：5,000円 郵便振替口座 00140-4-718645

東京本部 〒100-8691 東京中央郵便局私書箱 551号 TEL/FAX(03)5978-3636
 関西支部 〒581-0868 大阪府八尾市西山本町 7-6-24 (山田文明方) TEL/FAX(0729)90-2887
 東海支部 〒488-0044 愛知県尾張旭市南本地ヶ原町 2-114 (金 国雄方) TEL/FAX(0561)54-4590
 カルメギ・ホームページ <http://homepage1.nifty.com/northkorea/> 領布 200円